
古代アメリカ学会会報

第47号



図版 コパン遺跡 ヌニェス・チンチージャグループ
発掘調査中の建造物 9L-105 (2018年) ©五木田まきは

目次

◆会長あいさつ	1	◆自著紹介	39
◆第14期(2023年~2024年)役員選挙の結果について		◆主催シンポジウムの報告	47
◆特集: 海外で古代アメリカを研究する: 中米編	2	◆研究懇談会の報告	48
◆会員からの寄稿	3	◆事務局からのお知らせ	51
	27	◆編集後記	55

2022年8月

*本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます

会誌第 47 号の発行に寄せて

井口 欣也（古代アメリカ学会第 13 期会長）

2019 年から本学会の会長を務めさせていただきましたが、今年 12 月末でその任を終えることとなります。この間、学会運営にご理解とご協力をいただきました会員の皆さんに心より感謝を申し上げます。



また、この 2 年間（第 13 期）の学会運営を支えてくださった代表幹事の井上幸孝さんをはじめとする役員の方々、各委員会・WG のメンバーや幹事の皆さん、そして学会運営に適宜有益なご助言をいただきました監査委員のお二人（長谷川悦夫さん、芝田幸一郎さん）に心から御礼を申し上げます。

振り返りますと、2020 年からは学会運営のさまざまな局面で新型コロナウイルス感染拡大への対応に迫られました。しかしながら、この間に蓄積された新たな経験は、今後の学会活動に活かすことができる新しい可能性や選択肢も同時に生み出したともいえます。

この『古代アメリカ学会会報』（担当役員：千葉裕太さん、五木田まきはさん）では 2020 年の第 45 号、21 年の第 46 号でパンデミックに関連する特集記事が生まれ、多くの会員のみなさんの寄稿によって、研究・教育・普及活動における多様な乗り越えの経験を学会として共有することができました。

過去 2 年間の研究大会は感染拡大防止の観点からオンラインによって開催されましたが、研究懇談会は、お二人の幹事（松本剛さん、村野正景さん）の企画によって発表の動画公開とオンラインでの質疑応答を併用した新しい方法で行われ、大変活発な議論がおこなわれました。学会活動の柱である研究（担当役員：松本雄一さん）活動と学会誌発行（担当役員：山本睦さん、福原弘識さん、市川彰さん）においても、パンデミックにより歩みを止めることなく、むしろ活発化することができました。すでに会員の皆さんにはご連絡しましたとおり、今年 12

月の研究大会・総会は、名古屋大学・野依記念学術交流館で 3 年ぶりの対面開催を原則とすることが決定しました。従来の直接対面的な議論や研究交流が活発におこなわれ、会員の皆さんにとって意義あるものとなることを願っています。

また、本学会では科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の助成を受け、昨年 12 月に公開シンポジウム「まなぶ、たのしむ南北アメリカの古代文明－研究成果から学びの場へ」を 2 日にわたりオンラインで開催しました。パンデミックの影響で 1 年延期されたイベントでしたが、多くの参加者を集め、大変有意義なシンポジウムとなりました。実行委員長を務めた渡部森哉さんをはじめ、委員の皆様（井関陸美さん、伊藤伸幸さん、小林貴徳さん、芝田幸一郎さん、松本雄一さん）には、科研費の申請から企画と実施、そして講演録の作成に至るまで、多くの時間を割いてご尽力をいただきました。ここにあらためて感謝を申し上げます。シンポジウムを通じて、研究成果の発信や中学高校の教育現場との連携について多くの示唆が得られたとともに、本学会の効果的なアピールになったと思います。また、高等学校教育のための授業案作成ワーキング・グループのみなさん（井上幸孝さん、市木尚利さん、伊藤伸幸さん、多々良穰さん、森下壽典さん、渡部森哉さん、松本雄一さん）にも今年から実施されている新指導要領の歴史教科書をもとに検討をしていただきました。

本学会にとって広報・発信は重要課題の一つですが、2020 年には学会ウェブサイトが大変見やすく洗練されたデザインに一新され（担当役員：宮野元太郎さん）、現在はスペイン語版サイトの作成（担当役員：ダニエル・サウセドさん）も進行しています。

学会事務においては、感染拡大防止のため役員会をオンラインにしたり、会員の皆様への郵送物の多くをメール送付に切り替えたりなどの対応をとりましたが、これらのことは結果的に

学会事務経費の大幅な削減につながりました。事務局では前例のない仕事も多く負担が大きかったのですが、事務幹事の佐藤吉文さん、同補佐の小林貴徳さん、会計の浅見恵理さんの活躍により支障なく運営することができました。

一方で、今期には十分に果たせなかった課題もいくつかあります。

本学会員の調査研究活動や出版等の活動は非常に活発で、これまでに多くの成果を蓄積してきたといえます。これを将来的にさらに発展させていくためにも、「継承」や「育成」という課題に、学会として積極的に取り組む必要があります。

その点で、近年の会員数の推移は少々気になるところです。現在、本学会の会員数は151名(2022年8月5日現在)で、会員数が最大であった2008年の175名から毎年微減し、ここ数年は150名前後を維持しているという状態です。とくに、学生会員の入会が以前と比べるとあまり多くありません。無論、会員の数が増えればそれでよいということではありませんが、

学会の活動と運営を支える基盤としては指標のひとつとなります。これまでの学術成果と学会のネットワークを次世代へと継承すると同時に、今後、本学会が社会的なプレゼンスを高め、また安定した運営基盤を確保するためにも、できれば会員数をもう少し増やしていくことが必要だと思われます。そのためには、これまでどおり会員の皆さんが研究成果をあげ発信し続けていくことが重要であることは言うまでもありませんが、今後は、学会としての広報普及活動をさらに力をいれることや、若手育成のための研究イベントの実施を企画することなども重要だと思います。

今年実施された役員選挙で、来期(2023年～2024年)の会長に青山和夫さん、そして代表幹事には今期に引き続き井上幸孝さんが選出されました。会員の皆様には、本学会の発展のため、新体制のもとで引き続き学会活動への積極的なご参加と運営へのご協力をお願い申し上げます。

第14期(2023年～2024年)役員選挙の結果について

本年5月23日(月)から6月5日(日)までの期間に郵送投票で実施された第14期役員選出選挙について、6月11日(土)に関西外国語大学で開票作業が行われ、以下の方々が当選いたしました。学会の運営につきまして、会員の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

新会長 青山 和夫(茨城大学)
新代表幹事 井上 幸孝(専修大学)

新監査委員 渡部 森哉(南山大学)
松本 雄一(国立民族学博物館)

特集：海外で古代アメリカを研究する：中米編

本特集では、海外での古代アメリカ教育に関して、教員として教える側に立ったことのある会員や、留学生として教わる側に立ったことのある会員、あるいはその両方の経験をもつ会員に、経験談をご執筆いただきました。今回はメキシコおよび中央アメリカをフィールドとする会員にフォーカスしています。本特集では以下の会員にご執筆いただきました。

古手川博一（メキシコ、メキシコ国立自治大学/ベラクルス大学/コルドバ博物館、
ホンジュラス、ホンジュラス国立自治大学）

鈴木真太郎（メキシコ、ユカタン自治大学/メキシコ国立自治大学）

市川 彰（アメリカ、コロラド大学）

八木 宏明（アメリカ、テュレーン大学）

久保山和佳（イギリス、サウサンプトン大学）

（カッコ内は記事内の就職先/留学先）[掲載順、敬称略]

将来的に、留学して古代アメリカ研究を行いたいと思っている方や、海外での就職を目指している方にとっても、たいへん有意義な情報になると思います。また、ご執筆いただきました会員の皆様には、この場を借りて感謝申し上げます。（編集委員）

●日本国外で古代アメリカを研究する利点と難点、そして続ける事の大切さ

古手川 博一（ホンジュラス国立自治大学）

はじめに

海外で古代アメリカを研究する際にも、日本で古代アメリカを研究する際と同様に利点と難点がある。そこで、このエッセイではその点に焦点を当てて、私個人の経験談を聞いてもらいたいと思う。

私は、今からちょうど 30 年前、國學院大學で考古学を学び始め、そのまま大学院博士課程後期まで進学し、その 5 年目で単位取得退学するまで 11 年間在籍した。國學院大學は日本考古学で有名な大学の一つであるが、メソアメリカ考古学の専門家はいなかった。しかし、大学の自由な校風から教授陣は学生が希望するどんなテーマにも対応してくれたので、私も入学当初から興味を持っていたメソアメリカ文化の中からオルメカ文化を学部の卒論から博士課程後期までの研究テーマとして選ぶことができた。これは、私が手にした最初の「幸運」であることは当時も今も十分に理解している。國學院大學在学中に指導教官を引き受けていただいた、加藤晋平先生、小林達雄先生、藤本強先生には

多大なるご迷惑をかけてしまったし、永峯光一先生、吉田恵二先生、椛山林継先生をはじめ多くの先生からご教授頂いた考古学に関する多くの知識や技術は、今でも私の考古学の基盤となっている。日本人として日本語教育によって考古学の基礎を教えてもらえたことは日本で学ぶ大きな利点だろう。もし、この時点で私の希望が受け入れてもらえていなかったら、今の私はいなかった。そのような、ある意味では恵まれた環境にいたのであるが、日本でオルメカ文化を研究するには最新の「生の情報」に触れる機会が無かった。メソアメリカのマヤ地域、メキシコ中央高原、そしてオアハカ地方の古代文化と比べるとオルメカ文化研究者の数は世界的に見ても少なく、故に出版物もそれほど多くはなかった。しかも今から 30 年前では出版物の主体は紙媒体であり、現在のデジタル媒体のような比較的容易にアクセスできる状況では無かった。そのような状況で漠然と「手詰まり感」つまり難点を感じていた私に、転機となる次の「幸運」が訪れたのは博士課程後期 2 年目のことで

あった。

メキシコでメキシコの古代文化を研究すること

前年からテオティワカン月のピラミッドで杉山三郎先生が調査をしていたのであるが、その調査に参加していた友人の村上達也氏が推薦してくれたおかげで、1999年の調査から私にも参加が許された。この時が私にとって初めてのメキシコでの本格的な考古学調査への参加であった。幸い、日本で博士課程前期に在籍している間に、前述の吉田恵二先生の紹介で田辺昭三先生を日本人考古学者の長とする日中合同のニヤ遺跡調査に参加させて頂いていたので、2度目の国際的な調査への参加であった。テオティワカンでは多くのアメリカやメキシコの考古学者と知り合うことができ、まさに「生のメキシコ考古学」に触れることができ、この頃からメキシコでオルメカ文化の勉強がしたいと考え始めていた。

専門家がほとんどいない日本でオルメカ文化を研究する難しさを感じていた私は、今からちょうど20年前、メキシコ政府の奨学金を得てメキシコ国立自治大学 (UNAM) の人類学研究所でアン・サイファース博士の指導を受けて博士課程を再び始めるという「幸運」を手に入れることができた。しかし、今、思い返してみると、本当に無謀なことをしたと思う。当時の私は、スペイン語も英語も満足に話すことも理解することもできなかつたし、オルメカ文化についても書物によって独学で学んだものなので、とても浅い知識であった。

このようにして、色々な人たちの援助を受けて、憧れていたメキシコでの大学院生生活が始まるが、最初のおよそ10ヶ月は、午前中はUNAMの中にある外国人向けのスペイン語学校に通ってスペイン語習得を目指し、午後は、人類学研究所の図書館に通って、ひたすら文献を集め、読み漁って過ごしていた。しかし、研究所に行けばサイファース先生や他の学生たちがいるので、拙いスペイン語を駆使して彼らからオルメカ文化のことについて色々教えてもらうことができた。その多くは、まだ出版されていない最新の発掘データを基にした解釈であり、まさに、日本にいた頃の私が求めていた「生

の最新情報」であった。このようにして書くと、まるで私が先生や友人たちと簡単に意思疎通をしているように見えるかもしれないが、当時の私が持ち合わせていたのは片言のスペイン語だけで、言いたいことの1/10も伝えられなかつたし、彼らが言っていることの半分も理解出来ていなかったと思う。母国語以外で専門的な知識を得るのはとても困難である。それでも、彼らは辛抱強くいつも私に話しかけてくれた。その甲斐もあって、3年、あるいは4年くらい経つと、だいぶお互いの言いたいことが伝わるようになったと思う。このように現地で研究の方が言語習得においてもその機会も質も増えるのは大きな利点であるし、考古学的な観点でも生データのそばにすることが出来ることは、毎日のように何か新しい情報が入ってくる利点もある。

サイファース先生から提案された博士課程での研究テーマはオルメカ文化の大型石彫に表現される人物の衣装に関する研究だったので、1年目の週末、そして冬と夏の長期休暇はデータを集めるためにメキシコ国内の博物館を巡った。この時に訪れた博物館は以前にも訪問したことがあったが、この時は博士論文のために写真を撮らせてほしいということを入館時に説明して、許可を得て入館した。どの博物館でもとても丁寧に対応してもらえたことを今でも覚えている。このように比較的簡単に移動できるのは現地で研究する大きな利点である。



写真1 ラ・ベント遺跡博物館訪問 (2003年)

大学院もだいぶ慣れてきた2年目からは、朝から晩まで集めたデータの整理と分類、そしてこれまでに集めた文献を読み漁る日々の繰り返

しである。そして、ある程度のデータを整理できたら、博士論文の執筆に取り掛かる。そのような作業を繰り返し、各学期終わりには、指導教官の先生たちと調査成果について議論するミーティングがあるが、これがいわゆる学期末試験なので、毎回冷や汗をかいたのを覚えている。ストレスというものを感じたことがなかった私でも、初めて大きなストレスを感じていた。しかし、ひたすらにやりたいことだけをやることができたこの頃はとても貴重な時期だったが、当時の私はそんなことを感じる余裕は全くなかった。現地の専門家の意見を直に聞くことができ、疑問に対する回答がすぐに返ってくるという状況を得ることが出来るのは現地で勉強する大きな利点である。また、この頃からテオティワ坎の月のピラミッドと一緒に働いていた嘉幡茂氏も同じ大学院に進学したので一緒にアパートに住むことになった。お互いの研究テーマも指導教官も違うので日中の活動は全くの別行動だったが、夜や週末には考古学について色々と議論することができたのは本当に良かった。時には私たちより前からメキシコ国立人類学歴史学学校（ENAH）で考古学を勉強していた塚本憲一郎氏や他の友人たちも招待して、いわゆる「魔法の水」の力も借りて大勢で色々なアイデアを議論することができたし、何よりストレスの発散ができたことは大きな助けになった。



写真 2 村上達也氏、嘉幡茂氏、塚本憲一郎氏とメキシコシティにて（2008年頃？）

大学院生活が3年ほど経った頃、大学院での同期の友人、ロベルト・ルナゴメス氏がベラクルス大学の学生をメディアス・アグアス遺跡に発掘実習に連れて行くということで、私も誘っ

てくれた。これが私にとってメキシコ湾岸のオルメカ文化地域での初めての考古学プロジェクト参加で、そして初めてメキシコ人の学生に考古学を教える機会にもなった。もちろん、この頃にはメキシコに住み始めた当初よりも少しはスペイン語も上達していたと思うが、まだまだ、言いたいことを全て伝えることはできなかったと思う。それでも、ルナゴメス氏や以前からメキシコに住んでいた黒崎充氏が現地地で色々と助けてくれたので、多くの貴重な経験を積むことができた。メキシコは広大な国なので、地域によって全く環境が変わり、その地域ごとに気をつけるべきことが異なるということをこの時に学ぶことができた。そしてこの時に学んだ様々なことが、後々にこの地域で色々なプロジェクトに参加する際に助けとなった。



写真 3 ルナゴメス氏によるメディアス・アグアス遺跡での調査（2004年）

このように、当初はかなり無謀な挑戦だった「現地に行って研究する」という行動は、結果的には、いつも助けてくれる多くの友人たちを得ることができ、彼らと考古学について語り合ったり、色々な遺跡を訪問したりという沢山の「幸運」な機会を与えてくれた。また、奨学金は4年で尽きてしまったが、まだ博士論文を提出できていない私は、日本に戻らずにメキシコに残るという選択をした。したがってそれから、様々な調査へ参加して生活費を稼ぐことになった。もちろん、そんなに都合よく生活費を稼げるような調査に参加する機会はないのだが、数年間でもメキシコに住んでいたおかげで多くの先生や友人たちがいつも私を助けてくれた。そして、色々なプロジェクトに参加して行く過程で、「いつか自分のプロジェクトを持つ」という新たな夢が芽生えてきたのである。



写真 4 トランカレカ遺跡訪問 (2005年)



写真 5 アン・サイファース博士によるサン・ロレンソ遺跡の調査 (2007年)



写真 6 カール・ウェント博士とルナゴメス氏のアロージョ・ペスケーロ遺跡調査 (2008年)



写真 7 塚本憲一郎氏のエル・パルマール遺跡の調査に参加 (2009年)

様々な考古学調査に参加して行く過程で、友人たちの数も増え、彼らからベラクルス大学で授業をしないかと誘われ、少し躊躇したがこの新しい仕事にも興味を覚えたので、挑戦してみることにした。こういう機会が巡ってくるのも現地に残る利点であろう。奨学金が切れた後に色々なプロジェクトに参加している間にも、私の役割は若手の考古学者をまとめることや作業指示することだったので、授業という形ではないが、やっていることは同じだろうと高を括っていた。しかし、実際は全く違うものだというのを徐々に知ることになった。当たり前のことなのだが、人に何かを教えるには自分自身がそのことについて詳細に知っている必要がある。実際に授業の準備をしていると、不確かなことが沢山出てきて、それを調べ始めるとあっという間に時間が過ぎていった。たった1コマの授業を準備するのに丸々1週間を費やしてしまう日々が続いた。

そうやって2年ほど働いた後、専任で働く機会を得ることができ、授業のコマ数も収入も増えたので、さらにベラクルス大学での仕事に没頭するようになっていった。実はこの専任の仕事を得るための公募では、ベラクルス州内で発掘実習を実施するプロジェクトを提供することが求められていた。メキシコでは通常、発掘調査を実施するにはその遺跡を含む地域の踏査と遺跡地図の作成が求められる。つまり、私は既に他の考古学者によって踏査が実施され遺跡地図が作成されている遺跡で新しくプロジェクトを立ち上げる必要があった。そこで、思いついたのが数年前にルナゴメス氏に連れてってもらったエステロ・ラボン遺跡だった。この遺跡は、既に2回踏査が実施されており、それぞれの踏査で遺跡地図も作成され出版されていた。また、それらの先行研究で、この遺跡が初期オルメカ社会の首都サン・ロレンソの2次センターとして機能していた中規模遺跡であるという見解が発表されていたことも私の興味とうまく合致していた。ところが、この遺跡で新しいプロジェクトを立ち上げるためには1つ大きな問題が残っていた。これらの先行研究を実施した考古学者は当時、エステロ・ラボン遺跡からもオルメカ研究からも遠ざかっていたのであるが、この遺跡は私の指導教官サイファース博士が実

施している調査研究の領域内に位置していた。実は、先述の先行研究の一つは、サイファース博士の教え子の博士論文であった。それに、ルナゴメス氏に遺跡に連れていってもらった時、彼は私に「本当はこの遺跡調査したかったけど、サイファース博士から許可がもらえなかった」と話してくれた。しかし、まずは彼女と話をしないと何もできないし、他にいきなり発掘調査を始めることが可能な遺跡を思いつかなかったので、覚悟を決めて彼女に電話することにした。電話に出たサイファース博士はいつものように明るく気さくに話をしてくれた、そこで、覚悟を決めてベラクルス大学の公募に応募するために、エステロ・ラボン遺跡で調査をさせて欲しいという旨を伝えた。少しの沈黙の後、彼女は快く私の願いを聞き入れてくれ、彼女の調査地域の中にあるエステロ・ラボン遺跡で私が独自の調査することに問題がないという旨をメキシコ考古学審議会宛に一筆書いてくれると言ってくれた。

こうして、また色々な人たちの力を借りて「自分自身のプロジェクトを始める」という大きな夢が実現することになった。今から、ちょうど 10 年前のことである。プロジェクトには多くの学生たちも参加してくれて、何人かはこの調査を基にした卒論を書いてくれた。授業は相変わらず準備に時間がかかり大変だったし、私自身の博論の進展も停滞してしまっただが、自分のプロジェクトを実施しているということが大きなモチベーションとなっていたので、とても充実していた。初めて単独でのスペイン語論文出版ができたのもこの頃のこと、内容はもちろんエステロ・ラボン遺跡の調査に関するものであった。



写真 8 エステロ・ラボン遺跡での調査 (2015 年)



写真 9 エステロ・ラボン遺跡調査メンバー (2015 年)

その後、今からおよそ 7 年前から、ベラクルス州コルドバ市にある小さな博物館で館長として働くことになった。前職と同様に、このような機会が巡ってくるのは本当に現地にいる利点である。私が着任した当時は、町のタクシー運転手ですらこの博物館の存在を知らないという状況であったので、私を招いてくれた博物館の後援者たちと市役所は、その状況を改善することを第一に求めていた。幸い、主な収蔵品はコルドバ市周辺の考古遺物であったので私の専門とは異なるが展示内容は考古学に関するものだったし、日本で博物館等の学芸員資格を取得していたので、その頃に学んだことが大きな役に立った。まず、展示コンセプトの変更、展示内容に関係するイベントの計画と実施、それらの活動を基盤としての博物館の存在自体を市内でアピールするということを実施した。当初はなかなか効果が見られず、どうするか迷った時期もあったが、これまで構築してきた人脈を利用して講演会やシンポジウム等開催など試行錯誤しながら効果的な戦略を探った。その甲斐もあってか、2 年、3 年と経つとイベントへの参加者も増え、イベントがないときの来館者数の数も少しずつ増え、博物館に対する市民の認知度もだいぶ上がってきたと感ずることができるようになった。

2018 年初頭には、博物館着任当初に私に期待されていたことはほぼ達成できたと感じていたし、館長とは名ばかりで、実際には他に学芸員もいないので、ほとんどの博物館運営業務を一人でこなさないといけないという状況で、私自身の研究のために調査に出ることが困難になり、

それが大きなフラストレーションになっていた。



写真 10 コルドバ博物館での考古学に関する特別展 (2018 年)

ホンジュラスからメキシコの古代文化を研究すること

コルドバ博物館での仕事はそれなりに楽しくもあり、勉強になることも多くあったが、前述のように大きなフラストレーションを感じていたので、そろそろ他の仕事を探そうとしていた。そんな時、たまたま受け取った世界考古学会議のメールを通じてホンジュラス国立自治大学で教員として考古学者を探している事を知り、すぐに履歴書を送り、博物館の後援者たちにはその旨を伝えた。

幸い、応募したのは私だけだったようで、客員教員として採用してくれるという返事もあり、2018年5月末にホンジュラスに引っ越すことになった。引っ越しと言っても、まだ、本当にやっていけるのかよく分からなかったし(ホンジュラスの地を踏むのはこの時が初めて)、採用期間もとりあえず年内ということで、必要最低限の服などを持っていく長期間の旅行感覚だった。しかし、先方からのメールには将来的には本採用になる可能性もあるとのことだったので、一応その覚悟もしていた。ただ、この時点ではホンジュラスは距離的にもそれほど遠くはないし、大学勤務は博物館勤務よりもメキシコでのプロジェクトに戻る機会が増えるであろうというくらいの大雑把なイメージしか持っていなかった。それに、先方からはホンジュラスの考古学はまだまだ手付かずの地域や分野が多いので色々やることができると聞かされていた。もちろん、ホンジュラス国内からいくつかのオルメカ文化との関連を示す報告もされ

ていたもので、そういうものにも触れることができるのではないかという淡い期待もあった。

新しい職場は、教員や学生の数も少なくアットホームな雰囲気、とても仕事のしやすい環境であった。色々不慣れなこともあったが、授業も以前ベラクルス大学で作った授業を使うことも出来たので、比較的自由に仕事することができた。最初の客員教員としての契約の半年間が終わった後も、専任勤講師の待遇で契約してもらい、担当する授業のバリエーションも増え、発掘実習や卒論演習なども担当させてもらえるようになっていった。年末年始には約1ヶ月の休暇があり、2年目から変更されたセメスター制のシステムではセメスター間には約2週間の休暇が取れるようになった。これで、当初計画していたように少しは自身のメキシコでのプロジェクトを再開できると期待が膨らんでいた。しかし、ここで、小さな問題が浮上してきた。実は、メキシコからホンジュラスに初めて移動した時に、若干、おかしいとは思っていたのだが、航空運賃が地理的な距離の割に異常なほど高額なのである。最初は、急に決まった移動だったので、航空運賃が高かったのだろうと思っていたが、実はそうではなく、利用者が少ないので運賃が高いということにこの頃になって気がついたのである。決して払えない額ではないが、短期間の滞在のために払える額ではなかった。当時、同じ金額を払えばメキシコから日本へ移動できるほどの額である。つまり、職を変えることによって時間を得ることは出来たが、経済的な問題が新たに浮上し、メキシコで調査を続けるのは思っていたほど簡単ではない事を悟った。



写真 11 ホンジュラス国立自治大学人類学学科考古学専攻生と発掘実習 (2019 年)

さて、どうしたものかと思案している時に、今度は日本から京都外大の南博史先生が救いの手を差し伸べてくれた。2019年4月から京都外大ラテンアメリカ研究所に客員研究員として所属することになり、科研費への応募が可能になったのである。

これは、金銭面で問題が出ていた私にとって、おそらく唯一の解決策になるだろうということで、翌月が締め切りだった科研費「研究スタート支援」というカテゴリーに応募した。すでに科研費を得ていた友人、嘉幡氏が色々とおアドバイスをしてくれたおかげで、初めての応募で研究費(19K23119)を獲得することができた。これで、当初の計画通りメキシコでの調査に戻ることができると思っていたのも束の間、2020年3月にはホンジュラスでも新型コロナウイルス感染症によるパンデミックが始まってしまった。当時、2週間の夏休みを利用してメキシコで短期間の発掘調査をする予定だったが、計画を変更する必要が出てきた。幸い、私の研究において発掘調査は付加的な位置付けだったので、新たな発掘成果を使わない方法、そして現地を訪問する必要のないインターネットの活用によって研究を継続することができた。

多くの研究者が様々な影響を受けたパンデミックだが、ホンジュラスに拠点を置いていた私自身の調査においては、それほど大きな影響を受けることがなかった。最初は空港も封鎖され国内はロックダウンしていたので、アパートの外に出ることさえできなかつたが、11月くらいにはロックダウンも解除され、空港も開かれた。もちろん、移動中の感染対策など色々とお気をつけねばならなかつたがメキシコへの入国は全く問題なく出来た。ホンジュラスへの帰国も最初の年は簡易検査の陰性結果だけで入国できたし、ワクチン接種が始まってからは、簡易検査も必要なくワクチン接種証明書だけでホンジュラスへの帰国ができるようになった。調査地を実際に訪れることができたおかげで、科研費の調査も無事に終了することができた。



写真 12 科研費による研究の一環でサン・イシドロ村を訪問して講演会を開催(2022年)



写真 13 科研費による研究の一環でサン・イシドロ村での子供向けのゲーム教材を使った考古学情報の普及(2022年)



写真 14 科研費による研究の一環でサン・イシドロ村に保管されている先スペイン期石影の保護柵設置(2022年)

おわりに

このように日本国外で古代アメリカを研究すると利点も多くあるが、日本にいた時には気がつかない難点もある。さらに、「海外で古代アメリカを研究する」ということは、必ずしも研究対象国で研究するというのではなく、研究対象国外の日本国外で研究する場合も含まれる、そしてその場合は研究対象国で研究する場合とも状況が異なる事を知ることができた。しかも最近2年間は新型コロナウイルス感染症によるパンデミックという人類史上でも稀有な

状況を日本国外で経験することになった。

このような経験から私が言えることは、どこにいても、そしてどんな状況でも、古代アメリカ研究をすることができるということである。もちろん、それぞれの状況で様々な困難に直面することになるが、大切なのは強い意志を持って続けることだと思う。お気付きの方もいると思うが、私が考古学を勉強し始めてちょうど10年ごとに転機が訪れた。エステロ・ラボン遺跡のプロジェクトを開いた前回の転機から10年経った今年、ホンジュラスで教員として正式に採用された。もしかすると、何か成果が出るには10年くらい必要なかもしれない。

今現在日本から古代アメリカ研究している研究者もその多くが、一時期でも日本を離れて研究をしていた時期があったと思う。そして、その経験は今でも大きな意味を持っているのではないだろうか。また、その時にはきっと現地の多くの友人たちに助けられて、彼らとの深い絆を築くことができたのではないだろうか。

つまり、このエッセイを書き終えるに当たって、古代アメリカ研究に興味を持っている若い世代の人たちに言いたいことは、腰を据えて勉強することができる期間に一度は勇気を持って海外に出て欲しいということである。きっと、その経験や人脈が、その後、様々な困難な状況に直面した時に、強い意志を持って研究を継続

するきっかけや助けとなると思うからである。

また、今回のエッセイを通して、私自身が現在までにどれだけ多くの人たちに助けられてきたのかを改めて確認できた。そのような機会を人生では「幸運」と呼ぶのだと思う。しかし、一番の「幸運」は私のわがままを常に援助してくれた両親がいてくれたということだと思う。そのような両親の近くで親孝行をできないのが日本国外で研究をする唯一の難点なのかもしれない。もちろん、他にも日本国外にいと経済的な面や文化的な面で困難に直面することもあると思うが、お互いに歳を重ねた現在、私自身は多くの友人たちに囲まれているが、私にこのような充実した生活を与えてくれた両親のそばにいてあげられないのはとても心苦しい。



写真 15 サイファース博士の家でサンクスギビングデーのお祝い（2008年）

●メソアメリカで学ぶメソアメリカの人骨研究

鈴木 真太郎（岡山大学）

渡航

古代アメリカ学会会報には昨年の46号に続いての寄稿である。何度もお声がけをいただいている担当の方には、まず持って感謝を申し上げたい。

さて、今回の特集は「海外で古代アメリカを研究する」。担当の五木田さん曰く、海外で教鞭をとられている（た）先生方と留学経験のある学生さんにご寄稿いただきたいと考えている、とのことである。

確かに2019年に帰国して岡山大学に奉職するまで、筆者は4年間グアテマラ、デルバジェ大学に勤務し、いくつかの専門講義と個別学生の論文指導などを担当した。しかし、実は「どうやってその職を得たのか?」「グアテマラで働く現実とは?」などのトピックはすでに中公新書『海外で研究者になる-就活と仕事事情』において、著者の増田直紀先生とのインタビューで語り尽くしてしまっている。については、そういった職務上の諸々に関して

は是非そちらを参照していただきたい。

それではこちらで何を書こうか。そう考えた時、おそらく凡庸な筆者のキャリアの中で唯一特徴的と言えることがあるとすれば、それは「現地メソアメリカの教育機関で、古人骨研究という専門性に特化したキャリアを形成した。現地で修士も博士も終えた」ということではないだろうか。

もちろんそういった海外でキャリア形成をされた日本人研究者は他にも何人もいらっしゃるが、古代アメリカ学会員のなかで多数派ということはないだろう。さらに特に古人骨研究に特化した場合、筆者の知る限りでは他には一人もいないと思う。

となれば、現地の大学で古人骨分析のスペシャリストを養成するために、実際どのようなカリキュラムが組まれていたのか。それぞれの講義はどういった内容を扱っていたのか。現実的に外国人（日本人）学生の立場としてどんな負担を感じたのか。こういったトピックは、会員諸賢の興味の対象となり得るのではないだろうか。日本で学ばれた諸賢には、こんな違いがあるんだな、と面白がっていたら良いし、そして、海外で学ぶか、あるいは日本で学ぶか、今後の進路に悩む学生の皆さんには、そのキャリア形成のヒントの一助となることができるかもしれない。自叙伝のようで恐縮だが、お楽しみいただければ幸いである。

日墨交流計画

筆者が初めてメキシコに渡航したのは1996年、高校2年生の時だった。それから何度かバックパッカー的な旅行を楽しみ、大学を卒業して1年間のフリーター生活の後、2003年の第32回日墨学生等交流計画（現在の「日墨戦略的グローバル・パートナーシップ研修計画」）に参加した。1年間メキシコ政府に生活資金を支給してもらい、メキシコ国内の国公立大学で交換留学生として自由に学べる。筆者はこの制度を使って、ユカタン自治大学に学び、「Introducción a la arqueología」、「Material arqueológico」、「Arqueología del Norte América」、そして「Bioarqueología」を受講した。当然、当初

はほぼ講義の内容を理解することなどできなかったわけだが、やはり少しずつ4年間の『イスパニア語学科』が効き始め、8月に渡航して10月頃には、なんとか講義についていけるようになっていた。極めて基礎的な内容を現地の学生たちと共に学びつつ、語学を身につけることもでき、奨学金があるので生活に慌てることもない。いきなり正規学生として海外の大学院に入学するよりも、筆者としては現実的な判断だったのではないかと思う。

海外の大学院への（交換留学や語学留学でない）正規入学を希望する学生の皆さんには、こういった一種の準備期間を設けることを是非お勧めしたい。長い人生である。大学を卒業したら、即大学院！30歳を前に博士号を取って“若手研究者”になるのだ！ということだけが、唯一絶対の研究者への道というわけではない。学費と単位がかかる正規入学の前に、言い方は悪いが、ある種気楽な交換留学で現地の大学の雰囲気に触れ、学生たちの文化を感じておくことは、決して悪い選択ではないと思う。



写真 1 2003年当時メリダ市の中心部に存在したユカタン自治大学人類学部。現在では郊外のより大きな複合キャンパスへ移転している。

Maestría en Antropología Esquelética en la Universidad Autónoma de Yucatán

2003年～2004年の交換留学における最大の収穫は、のちに生涯の仕事となったバイオアーキオロジーとの出会い、そして Vera Tiesler 先生、Andrea Cucina 先生との出会いであろう。一生に一度あるかないか。まさに人生を左右する出会いであった。1年を通じて研究室に入り浸り、いろいろと面倒を見

でもらっているうちに、人骨研究の面白さにズブズブとはまっていき、彼らが主催する教育プログラム *Maestría en Antropología Esquelética* の開講を知るや否や、同プログラムへの正規入学を決意するのである。

余談だが、実はここでも 2004 年に帰国して 2005 年にプログラムが開講するまでの 1 年間、国内で再びフリーター生活をしている。メキシコ、ラテンアメリカを専門とする旅行会社でアルバイトをさせていただき、ここで学術的知見の行き着く先として、メソアメリカに興味を持つ広く一般の方々の存在を強く意識するようになった。こういうことが一般向けの新書執筆への動機づけになっていったりしたわけだが、つくづく人生において無駄なことなどないのである。

さて、大学院入学後はまさに嵐のような日々が過ぎていった。目まぐるしい毎日の中ではあったが、当時のことは今でもよく覚えており、手元には各授業のメモノート、講読資料、成績表が残っている。これらをベースに、現地の大学で考古人骨の研究という特化したキャリアを学ぶカリキュラムは、一体どういったものが組み立てられていたのか。どんなことが特に負担だったのか。以下にそのプログラムの詳細を紹介していこう。

Anatomía y fisiología humana

解剖学と生理学の講義であり、1 年目前期の必修科目であった。こちらは日々筆者たちが学んでいた人類学部（当時はセントロにあった）ではなく、かの野口英世が仕事をしてきたことでも有名なユカタン自治大学医学部に送り込まれで学んだ。医学生向けの解剖学教本を読み進め、毎週 2 回の講義では、数人のグループ内で各自がいくつかの骨を担当し「この骨はこういう形状をしており、どこどこにどういう筋肉が付着し、何々という神経が通ります」、というようなことをそれぞれ調べ、発表する。これを延々と繰り返すのである。馴染みのない解剖学用語をひたす暗記するというのがとにかく大変で、入学から数週間ですでに大学院そのものを挫折しそうな程の苦労をした思い出がある。ただ、ここでみっちり学んだ解剖学がその後の考

古人骨研究の基礎になっていることは言うまでもない。

また、ここでは献体の正常解剖（解剖実習）に参加して、生まれて初めて間近で人間の遺体を目の当たりにした。正直最初は遺体にメスを入れるという行為が不安でたまらない実習であったが、この経験を通して、考古学で扱う人骨（白骨）も、埋葬された当時は筋肉や皮脂に包まれた遺体だった、そして、その遺体は、時代や地域は異なれど、それぞれの人生を必死に生きた唯一無二の誰かであったのだという、ともすると忘れがちな大切な事実を強く認識することができた。

Teoría bioarqueológica

古人骨を考古遺物、アーティファクトとして研究するための論理的な枠組みを徹底的に学ぶ講義で、こちらも 1 年前期の必修科目であった。理論の講義であるため、とにかく毎回の講義のたびに読む講読量が多く（20 ページ前後の論文を毎回 2、3 本は読まされた）、何度も投げ出しそうになりながら、なんとかやり遂げたという感じである。グアテマラの大学でも感じたことだが、現地では考古学理論の教育を大変重視していると思う。

Osteología e identificación del esqueleto I

解剖学とはまた独立した骨学の講義で、こちらも 1 年前期の必修科目である。大量講読がなく（Tim White の教本で毎回該当する骨のセクションのみ、ほぼ写真を眺めつつ、キャプションを読んでおく程度）、実習的な講義で毎週楽しみにしていたことをよく覚えている。まずは教員が人骨（贅沢にもレプリカではなく最初から献体された本物の人骨を使っていた）を手にしながらか、それぞれの形態学的な特徴を説明し、考古学コンテキストでよく出土したり、あるいは研究で特に重要な意味を持ったりすることの多い部位の名称（例えば、恥骨結合面など）を紹介する。そのあとはとにかく実習、実習である。自らひたすら人骨を触り、眺め、時にスケッチするなどして、その形態と名称を頭に叩き込んで行く。年中を通して院生専用のスペースに 2 体の人

骨が置かれており、暇があればいつでもそこで骨を触って良いという理想的な環境が整えられており、「気がつけば夜になっていた！」と言う程に熱中して、同輩たちとこの実習を楽しんだ記憶がある。

Biología esquelética

骨にまつわるさまざまな生物学的な知識の講義で、こちらも1年前期の必修科目であった。とにかく講読量が多く（Anne Katzenbergの巨大な総説本の各回テーマに該当する1～2章分、だいたい50ページ前後を毎回読む）大変に難儀をした。毎回講義の前半では講読内容にまつわるディスカッションが行われ、しばらく黙っていると「なぜ黙っている？」と問い詰められる。そして、しどろもどろになっていると、「今回講読のテキストを見せてみなさい」（当時はまだコンピュータの画面でPDFを読むという習慣はほとんどなく、タブレットは存在していなかった。そのため、皆毎回の講読のコピーをもっていたのである）と言われるのである。そこでもしもテキストにマーキングや書き込みなどがされていないと見るや、さあ大変。ドヤされるのである。

ただ、このスパルタ講義のおかげで、例えば、タンパク質の摂取と身長の関係であるとか、エナメル質減形成が発生するメカニズムであるとか、同位体を分析して出自が判別できる理屈であるとか、古人骨を考古学で研究する際の主要な属性となり得る人骨のさまざまな生物学的な特徴について、網羅的、かつ徹底的に学ぶことができた。

Evolución y variabilidad humana

自然人類学の保守本流的な人類の進化と人類の多様性に関する講義で、これも1年前期の必修科目である。講読の文量はそれほどでもなく、大変に懐かしいStephen MolnarのHuman Variationを全員で読み進めた。毎回のセッションではまずグループで同書の内容を議論し、最後に教員が講義形式で各回の要点をまとめるというスタイルが取られ、“人種”の概念であるとか、人骨研究と人種差別の歴史であるとか、考古人骨の研究とは直接関わらないような内容に見えつつも、あらゆる

人骨の研究に携わる者として必須の基礎知識を体系的に学ぶことができた。

Osteología e identificación del esqueleto II

さて、ここからは2005年度後期の講義である。2006年の年が明けたくらいから、6月くらいまでに行われた。そのなかでもこちらは前期と連続した骨学講義の必修科目であり、似たような講義スタイルを取りつつも、講読が若干増え、死亡時年齢や性別の同定、生存時最大身長などの技術を実習して行った。ライフデータの取得方法などは既に社会に実装された基礎技術とも言えるため、Tim Whiteなどの教本を読めば話は早いのだが、あえてそれぞれの技術（例えば、恥骨結合面を対象とする死亡時年齢推定技術だけでも数種類が存在する）のオリジナルの論文を読みながら進めたのは、この講義の特にすばらしいところだったと思う。

なお、この連続骨学実習講義の欠点を、いまだからこそ、挙げるとしたら、病変やトラウマの鑑定があまり体系的にカバーされなかったと言うことである。やはり多種多様なパターンがあり、病変やトラウマを伴う資料がないと実習できないと言うところもあるが、できれば連続講義の一環として、病変やトラウマに特化したIIIも開講してほしかったな、というところである。

ちなみに筆者の場合、こういったテーマについては2年目の発掘実習で実資料を見ながら、それと、大学院を卒業した後の集中ワークショップという形で対応をしていただいた。

Arqueología mortuoria y tafonomía

近年Arqueotematologíaとして定義され、大きな注目を浴びている埋葬環境と肉体の腐敗の過程に関する研究の講義で、こちらも1年後期の必修科目である。マヤ文明圏に多い湿潤な温帯/熱帯の気候における肉体の腐敗、白骨化の過程のみならず、水中での屍蠅化や寒冷地や乾燥地でのミイラ化なども併せて学び（熱帯でもミイラ化は起こり得るが）、現場で出土した白骨から死亡直後の遺体を認識、復元する術を身につけることができた。

余談だがこの講義を受講している当時は、この分野における英語の文献が少なく、フランス語か、フランス語から訳されたクセの強いスペイン語の文献が多かった。講読量も多く、かつ読みにくく、非常に苦戦した記憶のある講義である。

Biomecánica

1年後期の選択必修科目で、筋肉がどう動くかをすると、それが骨格系にどのような形態学的な影響を及ぼすか、を体系的に学んだ。医学部からスポーツ医学の専門家を招いての講義であり、講読もスペイン語で既に確立した教本を読み進めるものであったため、非常に受講しやすく、人骨から古代人の生活スタイルを復元するための、基礎となる講義であったように思う。

ただ招聘教員の専門性がスポーツ医学であったため、考古人骨研究を目指す我々学生との親和性が若干低かったようにも感じた覚えがある。やはり餅は餅屋、考古人骨の取り扱いには考古人骨の専門家に任せろ、ということなのかもしれない。

Histomorfología

人骨の顕微鏡下における研究に特化した講義で、こちらも1年後期の選択必修科目である。骨代謝の形跡を調べることで細かい骨片からでもかなり正確な死亡時年齢の推定を可能にする **Histomorfometría** の多様な分析技術の習得を中心に、顕微鏡を用いた正確な病変の同定技術や、朱を塗るなどの死後の肉体への干渉について当該部位を剥片に切り出すことによってその過程を復元する方法なども併せて学んだ。偏光顕微鏡の使い方や試料の切断や研磨を行う装置の使い方も学び、実習的な性格の強い講義であった。

筆者は特にこの **Histomorfometría** について修士論文を書いているので、この講義はとても楽しく、有意義だったのだが、長時間の顕微鏡使用で視力が極端に悪くなったのは止むを得ない弊害であろう。

Estadística en bioarqueología

考古人骨研究における統計検定の運用に関

する講義で、こちらも1年後期の選択必修科目である。いわゆる多変量解析を取り扱うことはなかったものの、帰無仮説と対立仮説、有意水準の設定など統計検定運用上の基礎的なことを学び、パラメトリック、ノンパラメトリックを問わず主に群間の比較や分布の独立性の検定などを学んだ。

ちなみに当時は(少なくともメキシコでは)統計解析のパッケージがそれほど多様ではなく、また高額であったため、一般的な教本に従いながら、統計量を電卓で計算し、巻末の統計数値表から有意水準を判別する方法を学んだ。今となっては懐かしい記憶である。

Investigación tafonómica y de campo

さて、最初の1年間にこういった講読+講義の形式で徹底的に知識を詰め込まれたのち、2年目は実習(形式上選択必修科目として履修登録をした)として主に発掘現場に駆り出された。北部の島から沿岸部、カンペチェとの州境など、ユカタン半島を中心にさまざまな発掘現場でひたすら古人骨を発掘し続け、時には何度も改葬と追葬を繰り返され10個体以上が重なり合った極めて複雑なコンテキストにも巡り合った。これが住居を掘り抜いた発掘最下層での出土であったため、全く風が通り抜けず、さらに直射日光を避けるためナイロンで天井が吊られたため、北ユカタン沿岸の現場は50度を平気で超えた。意識が飛びそうになりつつも、複雑な現場で推理しながら発掘を進めていく醍醐味は今でも忘れられない経験である。

その後には、発掘をした以上、当然の資料整理と基本的な分析作業、報告書の執筆がやってくる。1年目で学んだ知識を実践しつつ、その成果である報告書の書き方も実習として学ぶのである。

Taller de investigación

いわゆるゼミに相当し、大学院に入学した1年目前期からここまで記述してきた全ての講義と並行して行われていた必修科目である。基本的に指導教員と一対一の議論の形式を取っており、スターターキットとして、関連する文献を大量に与えられた後(段ボール箱に

いっばいの本のコピーを与えられた)、その中から読んだ内容を毎週まとめ、自身の意見と共に発表し、その都度、教員からフィードバックをもらうのである。

1年目に入ってくると上記の様な講読と並行して、実際に自らの研究資料にあたる作業が追加され、毎週作業の進捗状況と今後の見通しを教員に報告した。わからないこと、気になることはすぐに教員と共有し、彼らとの議論の中で正解を導いていくことができ、大学院研究が指導教員との二人三脚のような関係で行われていたのが、懐かしい。



写真 2 2007年に研究室で行われたワークショップ。本項で記述した講義、実習以外にも数多くのワークショップが行われており、これは Pennsylvania State UniversityのGeorge Milner教授を招いて行われたTransition Analysisに関するもの。Jane Buikstra教授やLori Wright教授などマヤ地域の考古人骨研究の第一人者たちと直接意見を交換することのできる素晴らしい機会であった。筆者は後列左から二人目。
(Tiesler 2022:p11)より抜粋。

Doctorado en Estudios Mesoamericanos en la Universidad Nacional Autónoma de México

さて、上記のようなカリキュラムをくぐり抜け、2008年にMaeastría en Antropología Esqueléticaを修了した著者は(2007年8月に2年の課程を終えてから1年間を修論執筆に要した)、その後ホンジュラス、コパン遺跡の発掘に関わらせてもらったり、ユカタン自治大学の助手として働いたりした後、2012年にメキシコ国立自治大学の博士課程に入学した。こちらは当時奨学金事情が良好であったため、実に多様な分野を専門とする学生が『メ

ソアメリカ学』の名の下にこのプログラムに入学した。日本人研究者も多く輩出している。

当時のこのプログラムの特徴はメソアメリカ学に関係する研究を行うためであれば、メソアメリカのどこに滞在していても良く、また指導教員も UNAM の教員に関わらず自身の研究に最もフィットする人材を世界中から好きにチョイスして良い、ということであった。まさにメソアメリカという国境を超えた広域を研究するプログラムとして最高の立て付けだった様に思う。

カリキュラムとしては、基本的には研究を進めることが最優先とされていたが、当時は2つ、講義形式のセミナーを受講しなければならなかった。著者は先述したコパン遺跡の資料を使って博士研究を行っていたため、博士課程の1年目には既にホンジュラスに住んでいたのだが、セミナーには全てオンライン参加で対応していただいた。今となっては珍しくもないオンライン講義であるが、10年前からそのための成熟したシステムを備え、国境を超えたメソアメリカ研究推進のために、嫌な顔ひとつせず、対応をしてくれた UNAM の、そして Doctorado en Estudios Mesoamericanos の先進性には脱帽するばかりである。

セミナーは Linda R. Manzanilla 先生の「Arqueología doméstica」と「Teoría de formación de estado」を受講した。大変失礼な言い方になるが、良い意味で常軌を逸した講読量が課され(毎週のセッションに数百ページの本1冊、時に2冊、を全部読んできなさい、はよくある話)、その内容をグループで議論しあった後に(当然、読んでいないとセッションから追い出される)、要点を先生が説明してくれるスタイルが取られ、Bioarqueologíaを超えた純粋な考古学、人類学の理論を徹底的に叩きこまれた。

これだけ書くと Manzanilla 先生にはとにかく厳しい人のイメージが湧くかもしれないが、しっかりと講読をこなし、内容を理解した上で参加すると、これほど有意義で、また純粋に楽しいセミナーは他になかったように思う。素朴な質問や、人類の歴史という視点の壮大な考古、人類学理論を自身の研究に落

とし込んだ具体的な質問、時に批判的な質問、あらゆる質問、ふっかけた人類学議論に対して、極めて寛容に、真摯に向き合ってくれ、筆者のいわば「人骨分析技術を習得した」で止まっていた成長が、「人骨研究を通して考古学研究をする」に至ることができたのは、Manzanilla 先生とこのセミナーによるところがとても大きいと思う。



写真 3 2015 年のメキシコ国立自治大学中央図書館。大学のシンボルともなっている巨大図書館だが、実は筆者はあまりこの図書館には立ち入っておらず、たまに読書のスペースとして使っていたくらいである。というのも UNAM にはいくつもの研究所が存在し、それぞれに各分野に特化した図書館が存在するのである。筆者は馴染みの深い人類学研究所の図書館に入り浸っていた。

さいごに

さて、上限なし、という条件に甘えてひたすら書き連ねてきたこのエッセイだが、最後にひとつ大事なことがある。それは筆者の選んできた、この「海外で専門性に特化したキャリアを形成する」という選択は決して唯一の正解というわけではないということである。もちろん筆者自身はそれぞれの選択に後悔はないし、大変な思いもしたが、全て良い経験になったと思っており、このキャリア形成は正解だったと信じている。しかし、日本で学ぶ方が良い、海外で学ぶ方が良い、というようなことは結局のところ無い。それぞれの興味や関心、分野においてそれぞれの正解があるはずである。本稿はもう 10 年以上前の経験談に過ぎないが、実際に海外の大学院で経験したカリキュラム、講義の実態を、誇張することなく、伝えたつもりである。会員諸賢、特に学生の皆さんが、自らのキャリア形成におけるそれぞれの正解を探す何かの参考になれば幸いである。

参考文献

Tiesler, Vera (edit)

2022 *The Routledge Handbook of Mesoamerican Bioarchaeology*, Routledge, New York.

●国内で博士号を取得し、就職したのちに、米国に研究留学する

市川 彰（コロラド大学ボルダー校人類学部）

はじめに：研究留学の背景

筆者は、日本国内で博士号を取得し、名古屋大学高等研究院に特任助教として就職したのちに、日本学術振興会海外特別研究員（以下、海外学振）として、2019年7月から米国コロラド大学ボルダー校人類学部に研究留学をしました。古代アメリカ学会関係者で米国に留学されている方の多くは、博士課程から大学院生として米国に留学し、博士号を取得するという形をとるかと思われます。そのため、私の話は、それとは若干異なるルートの留学の紹介になるでしょう。以下で紹介する情報や制度は、現在では変更されている可能性もありますので、留学を検討されている方は最新情報を適宜ご確認ください。

海外学振は、博士号取得後（5年未満）すぐにポスドク研究員のような形で研究を發展させたい若手研究者用の制度として、一般的に理解されています。そのため、一旦、就職してしまうと申請資格がないと思われるかたも多いかもしれません。しかし、申請資格には、「大学等研究機関の任期の定めのない常勤研究職の職歴が過去通算して5年未満の者」という資格条件も含まれています。つまり、すでに研究機関に就職された方でも、資格をみたせば海外学振を利用して研究留学をすることが可能です。もちろん、所属機関には事前に了承を取る必要があります。

採用後、筆者は、J1ビザの手続きなどを済ませて、コロラド大学ボルダー校に向かいました。ここで注意しておきたいのは英語の能力です。通常、研究留学する場合、TOEFLなどの英語能力試験の結果が問われます。筆者の場合は、ビザ取得までの時間が短かったこともあり、TOEFLではなく、受入期間の担当者からインタビューを受けて、研究活動に支障のない英語能力があるか否かをテストされ、そのレビューをもって代替することができました。ただし、大学によっても異なる可能性がありますので、この方法が一般的であるとは限りません。

コロラド大学ボルダー校人類学部

コロラド大学ボルダー校は1876年創立の総合大学で、学部・大学院を含めて約35000人の学生がいます。コロラド州の州都デンバーから北に車で約40分のボルダー市に位置します。

人類学部は、文化人類学、生態人類学、考古学を三本柱として、アフリカ、アジア（日本含む）、アメリカなどをフィールドとする研究者が在籍しています（写真1）。そのうち、考古学を専門とする現役教員は7名、名誉教授が3名です。



写真1 コロラド大学ボルダー校人類学部棟

メソアメリカを専門とする現役教員は、オアハカ地域や考古学理論を専門とするArthur Joyce教授、歴史考古学や考古理化学を専門とするGerardo Gutierrez准教授、マヤ地域（特にマヤ低地北部）やコミュニティ考古学を専門とするSarah Kurnick助教がいます。そのほか、北米南西部、グレートプレーン、モンゴルを専門にし、統計学やデジタル技術の応用にも造詣の深い教員が在籍しています。コロラド大学は自然史博物館も有しており、博物館学についても多様な視点から学ぶことができます。

筆者が、コロラド大学ボルダー校を留学先として決めた理由は大きく二つあります。ひとつは、考古学理論の素養を強化することで

す。日本国内で博士号を取得した筆者は、独学で学んできたものの、考古学理論についてさらなる理解が必要であると感じていました。受入教員である Joyce 教授は、まさに最新の考古学理論に詳しく、またそれをきちんと考古学データに応用している研究者でした。また、オアハカ地域でも、やや周縁部で調査をしており、筆者のフィールド、すなわちエルサルバドルの状況とも重なる部分が多く、オアハカ地域の事例から多くを学べると判断しました。ふたつ目は、名誉教授に、エルサルバドルのホヤ・デ・セレン遺跡を長年調査してきた Payson Sheets がいたことです。筆者自身、長年、エルサルバドルで調査を実施してきましたが、Sheets 教授とはあまり交流がありませんでした。そのため、これまでとは異なる形で、身近に議論や相談できる相手がいることは、自身の研究に大きなプラスとなるに違いないと思ったわけです。

コロナ禍の研究活動

アメリカでの研究活動が始まって半年ほどして、新型コロナウイルスの感染拡大が始まり、キャンパスに行くことができなくなりました。それまでおこなっていた研究者や大学院生との学术交流も途絶えることになったのです。コロナ禍での研究活動の詳細については、本会報にも寄稿しましたので、そちらを参考にしてください（市川 2021）。

コロナ禍のなかで、筆者が特に意識したのは、それまでのデータをまとめ、英文査読誌に出版することでした。それまで日本語やスペイン語での出版はそれなりにありましたが、米国にきたからにはいくつかの英文査読誌で出版することがひとつの目標でもありました。受入教員や大学院生、学会で知り合った知人との議論や添削などを経て、なんとなくですが、調査研究方法の違いだけではなく、英文で論文を作成するコツや作法を学ぶことができたのではないかと思います。留学以前に何本か英文誌に投稿したことがありますが、いずれも掲載不可だった理由が、今ではわかる気がします。

学部内で幽霊部員のような存在であった筆者ですが、ひとたび論文が掲載されたり、研

究助成金を獲得したりすると、他の教員や学生らからお祝いの連絡がくるなど、少しずつ学部内でその存在が認められるようになってきました。そうしたストレートな反応は、実力主義のアメリカならではのところでしょうか。海外学振の任期が終了した後もコロラド大学ボルダー校に研究員として採用され在籍しています。これはこれまでの研究成果が学部内で認められたことの証左と言えるかもしれません。

2021 年に入っても、依然として、中米への渡航は難しい状況にありました。しかし、幸いにコロラド州とその周辺は米国有数の遺跡が集中する地帯であり、メソアメリカとの比較研究も視野に入れて、踏査をすることにしました。メサ・ベルデ遺跡、チャコ・キャニオン遺跡、カホキア遺跡などを回りました。詳細については、拙稿をご笑覧ください（市川 2022）。

2022 年になり、ようやくコロラド大学ボルダー校の Joyce 教授とともにオアハカ地域で新しい考古学プロジェクトも開始しました（写真 2）。



写真 2 遺跡近くのリオ・ベルデ川

家族での留学

J1 ビザで留学する場合、一人当たりの生活にかかる最低費用を確保し、証明する必要があります。海外学振制度からの支給額は、単身留学される方には十分な金額です。配偶者＋子供 2 名の場合でも要件をみたく支給額ですが、住む土地によっては厳しい支給額かもしれません。例えば、コロラド州、特にボル

ダー市近郊は、非常に家賃が高く、そのほかの物価も高いので、お子さんに様々な経験をさせたい方は、それなりの貯蓄も必要になるかと思います。

最初のうちは、英語に不慣れな家族のサポートと研究の両立に苦労しましたが、今では子供らが筆者の英語の発音を修正してくれ、妻は得意の料理で交流関係を広げていくなど、さまざまな意味で最も成長したのは子供と妻ではないかと思っています。おそらく家族での海外留学に躊躇したり、不安になったりする方もいるかと思っています。筆者と家族もそうでした。こればかりは出会いや様々な要因があるとは思いますが、筆者らの場合には、飛び込んでみたことで、失敗や成功から、公私ともに大きな学びが得られました。

おわりに

本稿では、博士課程からの留学経験ではなく、一度就職してから研究留学をした自身のケースを紹介しました。米国での筆者の用務

は研究が中心となっていますので、米国の大学のシステムや授業などについては十分に理解していないところがあります。これらについては他の寄稿者の情報を参考にさせていただければと思います。

就職後の研究留学は難しいと思うかもしれませんが、もちろん所属機関からの了承など多くのことが必要となりますが、海外学振制度はとても魅力的な制度だと思います。自分自身をさらなる高みに持っていきたい人にはうってつけの制度でもありますので、トライしてみるのはいかがでしょうか。

参考文献

市川 彰

- 2020 「米国コロラド州における COVID-19 の状況と研究教育機関の対応」『古代アメリカ学会会報』45、pp.10-17。
- 2022 「北米の遺跡と博物館探訪録」『チャスキ』63/64、pp.4-7。

●アメリカの大学院で考古学を学ぶ

八木 宏明（テュレーン大学人類学科 博士課程）

はじめに

私は 2019 年の秋にテュレーン大学人類学科の博士課程に入学しました。妻子を連れての渡米に不安もありましたが、3 年間の怒涛のコースワークを終え、ようやく博士論文のスタートラインに立ちました。博士課程の本番はこれからですが、今のところアメリカに留学できて本当に良かったと思っています。道半ばではありますが、博士号取得を目指しアメリカの大学院で勉学・研究に励む学生の声をお届けできればと思います。特に、留学を決意した時のことや、留学のためにしたこと、アメリカでの授業や試験などについて私の記憶がまだ鮮明なうちにまとめてみたいと思います。

スタートラインに立つまで

なぜアメリカの大学院に進学したのか。青

年海外協力隊の考古学隊員として中米で活動していた私は、帰国後のことを悩んでいました。漠然とマヤ文明の研究者になりたいと考えていましたが、どのような道を進めばいいのか分からずにいました。そんな中、松本雄一さんが本学会の会報に投稿された留学体験記¹を目にしました。そこに描かれていたのはイェール大学の美しいキャンパスで過ごす優雅な留学体験ではなく、日々の課題や語学の壁に苦悶する留学生の姿でした。読み終わるとワクワクしていたことを今でも覚えています。そのエッセイは私の挑戦心をかき立て、いつか厳しい環境で勉強してみたいと思うようになりました。松本さんのように歩きながら本を読み木にぶつかるといった経験はなく、PDF のおかげで論文が詰まった段ボールが山積みになるということもありませんでした。しかし、3 年間のコースワークとその後の資

格試験は本当に大変で、もう一度同じことを繰り返したいとは全く思いません。それでも、これだけ集中して勉強できる環境をしかも有給で与えてもらえるのはこの上なく贅沢なことであり、苦しくも充実した日々でした。

さて、話を少し戻します。2015年、協力隊の任期を終え帰国した25歳の私は、愛媛大学の修士課程に進学しました。(注：アメリカでは学部を卒業した後、直接博士課程に出願できる場合が多いです。)日本の大学院を選んだのは、その時にはアメリカの大学院に進学するための情報や伝手を持っていなかったことと、日本の大学院で考古学の専門知識や技術をしっかり学びたかったからです。後述しますが、アメリカの大学院の最初の3年は主に座学で、その内容は理論的なことに偏向しているため、考古学の専門知識や遺物の実測・写真撮影といった技術を学ぶ機会は少ないと思います。松本剛さんの留学体験記²にも書かれていますが、考古学の基礎を日本でしっかりと学んでおくことで語学のハンディキャップを多少は補うことができるし、コースワーク後の調査をスムーズに進めることができると思います。

日本にいる間とはとにかく情報収集をしていました。自分の研究テーマに合う教授とその大学のことをインターネットで調べてリストを作っていました。留学に関する指南書やブログで「知名度の高い教授が良い教育者とは限らない」、「知名度の高い大学が良い環境とは限らない」という言葉をよく見ます。私も基本的には同意見ですが、実際にアメリカに来て思うのは、その分野に従事している人々の中で知名度の高い教授や大学はやはり良い環境を提供しているということです。ただ、そのような現地での評判は日本にいる学生にはなかなか届きません。私も大学のリストを作ったものの、どの大学が自分にとって良いのかという点において判断材料を全く持ち合わせていませんでした。そこで、塚本憲一郎さんにメールでご相談し、現地にいる人だからこそわかる大学や教員の情報、大学を選ぶ上での具体的なアドバイスをいただきました。また、2017年に嘉幡茂さんに誘っていただき参加したトラランカレカ考古学プロジェクト

には、共同団長の村上達也さんに加え、塚本憲一郎さんと古手川博一さんも参加しており、海外で学位を取得し第一線の研究者として活躍されている方々から直接留学体験を聞くことができました。インターネットの情報だけでなく、実際に留学された方々から直接お話を伺う中で、徐々に自分の理想とする留学が見えてきて、同時に行きたい大学も絞られていきました。

松本雄一さんも書かれていますが、指導をお願いしたい教授に直接会って話をするのはとても重要だと思います。教授が見ず知らずの人を受け入れにくいこともそうですが、学生にとっても教授がどのような人かを知ることが重要です。また、教授の学生から話を聞くことも有益で、学生だからこそわかる教員や大学に関する情報を得ることができます。私はグアテマラの学会で現在私の指導教官であるマルチェロ・カヌート先生にお会いすることができ、自分の研究を説明し、アメリカ留学に関心があることも伝えました。また、ジェイソン・イエーガー先生に会うためにテキサス大学サン・アントニオ校にも行きました。その後イエーガー先生にはベリーズでの発掘調査に誘っていただき、大学院受験の際には推薦書も書いてくださりました。COVID-19が蔓延している中、直接会いに行くというのは難しいですが、オンラインで面会することもできますし、今年からやっとSAAなどの学会も元に戻り始めているので、そのような機会を活用することをお勧めします。

情報を集めていくうちに私の出願リストは絞られ、最終的には5つの大学院を受験しました。私は採用する側に立ったことがないので詳しいことはわかりませんが、大学院受験で最も重要なのは研究計画書(statement of purpose)だと言われています。私は愛媛大学に所属している時に国内外の調査に参加させてもらったので、その経験や自分の強みを強調し、自分がやりたい研究が出願先の教授陣の研究とどのように重なるのかを具体的に書きました。また、推薦書もとても重要だと聞きます。自分のことをよく知っている人をお願いすることが重要だと思います。TOEFLやGREは高い点数に越したことはないです

が、私は足切りぎりぎりの点数でした。最終的に3つの大学院から合格通知をいただきました。どの大学院の教員もプログラムも魅力的で最後の最後まで悩みましたが、経済面(奨学金の額や年数、授業料の免除等)、指導教官のプロジェクト、他の教員の研究テーマなどを考慮し、デュレーン大学に決めました。

怒涛のコースワーク

アメリカの大学院では大量の論文を読まされる、ということをよく耳にします。具体的にどれくらいの論文を読むのか。例えば、マルチェロ・カヌート先生が教える“*Archaeology of Daily Life*”という授業では1週間にだいたい15本の論文を読みます。彼は多くの課題を出すことで有名で、400ページを超える本を平然と宿題で出すタイプですが、多くの教授は週に5~8本の論文を出します。デュレーン大学の場合は一学期に4つの授業を取るため、学期中は週に30本前後の論文を読んでいたと思います。数字だけ見ると決して多くはありませんが、ただ読むだけではなく、ノートを取り、質問を用意し、さらにはリアクションペーパー(課題論文に対する自分の意見を2ページぐらいにまとめたもの)を書くことにもかなりの時間を使います。また学期の後半からは授業の課題と並行してタームペーパーを書き始めるため、学期中に時間に余裕があったことは一度もありませんでした。タームペーパーとは学期末に提出する20ページほどのレポートですが、資料の要約や感想文ではありません。自らテーマを設定し、データを集め分析し、自分なりの命題を示さなければなりません。例えば私はコパン遺跡の地図をデジタル化し、住居の面積を計算し、ジニ係数やローレンツ曲線を用いて富の分布について考察してみたり、GISを使ってアンデスの黒曜石の流通ルートを検討したりしました。内容が良かったかどうかわかりませんが、ジニ係数の論文は指導教官の目に留まったらしく、今年行われたSAAのMaya Residential Inequality Sessionに連名で発表に加えてもらえたことはとても嬉しかったです。

大量の課題に加え、アメリカの授業ではデ

ィスカッションへの貢献も求められます。これは日本人留学生の多くが苦勞することだと思います。英語ができるに越したことはありません。日本にいる間にできるだけレベルを上げておくことをお勧めします。ただ、英語を母国語とする人々に囲まれた状況で、皆の理解を深めるような意見や議論を進めるような発言ができる日本人は少ないと思います。私も例外ではなく、とても苦勞しました(現在でも苦勞しています)。コースワークを通じてディスカッションに貢献できたと感じたことはほとんどありません。しかし、質問を事前に用意したり、他の学生に質問してみたりと色々な対策をしてなんとか乗り切りました。また、どの授業でも最終日にタームペーパーの口頭発表がありますが、できるだけ分かりやすいパワーポイントを用意し、原稿を読まずに発表するなど、自分なりに語学のハンディキャップを補う努力はしていました。

英語で苦勞するのはディスカッションだけではなく、タームペーパーの執筆でも同様です。書く内容以前に、そもそも留学生が英語でいきなり20ページ近い論文を、しかも同時に4つも書き上げることは簡単なことではありません。最近では添削ソフトを使って英語を直すことができますが、一度添削ソフトだけを使って書き上げたペーパーを提出したところ、英語が酷すぎるというコメントが返ってきたので、以後必ずアメリカ人の友人に添削してもらうようになりました。

アメリカの授業の特徴の一つはシラバスにあると思います。教員はかなり力を入れてシラバスを作っている印象があります(日本の教員がシラバスに力を入れていないという意味ではありません)。どの授業でも最初にシラバスが配られ、授業で読む論文が全て記載されています。重要なのはその構成で、大抵どの授業も、あるテーマ(例えばurbanismやpolitical economyなど)を研究していく上で必ず必要な論文を古典から最新のものまで網羅しており、一学期を通して学習することで確かな基盤を作ることができます。最新の理論からスタートして未知の世界に踏み込んでいくかのような前衛的な授業を展開する教員もいますが、その場合でもシラバスに流れが

あり体系的に学ぶことができます。シラバスはそのトピックに対する教員の考えを強く反映しているので、コースワーク後においてもそのトピックを掘り下げたいと思った時にとでも役に立ちます。

具体的にどのような授業があるのか、いくつか紹介したいと思います。人類学科の名の下に文化人類学、言語人類学、形質人類学、考古学が統合されているデュレーン大学では考古学以外にも様々な分野の授業を履修することができます。例えば“Politics of Fieldwork”という授業は文化人類学者が教鞭を取り、考古学や言語人類学を専攻する学生も履修します。この授業では人類学者がフィールドワークやその後の解釈を行う上で重要となる自己再帰性（reflexivity）や立場性（positionality）などの概念が、人種、ジェンダー、社会階級、民族性、セクシュアリティといった力関係とどのように結びついているのかを考えます。この議論で注目されるのはフェミニスト批評（Feminist Critique）や先住民の方法論（Indigenous Methodologies）、脱植民地化（Decolonizing Anthropology）などで、Donna HarawayやJames Clifford、Linda Tuhiwai Smithなどの論考を読み人類学者がどのようにフィールドワークを行うべきか議論します。この種の議論は日本で考古学を学んだ私には新鮮でしたが、アメリカの学生にとっては基本的なことらしく、私の周りの院生の多くは考古学と現代社会との繋がりを強く意識しています。博士論文においても単に遺跡を発掘し遺物を分析するのではなく、地域社会にとって意味のある調査をその地域の人々と共に行いたいとよく話しています。

意外にもアメリカでは統計解析を体系的に学べる大学院は少ないらしく、独学で学ぶ学生が多いと聞きます。幸いデュレーン大学では“Quantitative Methods in Anthropology”という授業があり、人類学で頻繁に使用される統計解析を体系的に学ぶことができます。最近では考古科学の普及に伴い、統計解析を論文で見ることが多くなりました。正直、これまで私は統計解析の部分をよく読み飛ばしていました。どのようなデータがどのように

処理されているのか、それは適切な方法なのか、その結果は適切に解釈されているのか、といったことを深く考えることをせず（無知ゆえに）、統計解析の結果や解釈を鵜呑みにする傾向がありました。また、解析方法の背後にある理論をあまり理解せずにSPSSやRといった統計解析ソフトを使っていました。このような悪い癖を直してくれたのが“Quantitative Methods in Anthropology”でした。この授業では伝統的な統計学からベイズ統計学まで人類学でよく使用される統計解析の理論や使用方法、その弱点までを実際にデータを分析しながら学ぶというものでした。統計解析が使用されている論文を批評するということもしましたが、誰もが知っている雑誌に載っている論文にも必要なデータを提示していないものや解析方法の誤用、P値を過信しすぎているものなどが多くあることにとっても驚きました。

そして資格試験（Comprehensive Exam）

コースワークを終えると資格試験があります。デュレーン大学では筆記試験と口頭試験の両方があり、筆記試験は3日にわたって行われます。1日目は方法論について答えます（放射性炭素年代測定や産地同定の方法など）。2日目は学生が専門とする地域のことについて聞かれます（例えば、メソアメリカとは何か、など）。3日目は理論について、近年の主要な考古学理論について論述します。どの問題にも正解があるわけではなく、勉強してきたことをもとに自分の考えを示すことが求められます。筆記試験の約1ヶ月後に今度は口頭試験があります。これは筆記試験の自分の回答に対して教授陣がさまざまな質問をして、それをもとに議論が展開されます。2時間ほどの口頭試験はもちろん緊張しましたが、4人の教授が自分の回答に対して様々な意見を述べてくれるので、とても貴重な経験でした。

私が体験談として語れるのはここまでです。このあと待っているのは博士論文の研究計画書（prospectus）の執筆で、これが審査委員会に認められてやっと博士候補生になれます。これはコースワーク以上に大変だと聞きます。

しかし、やっと自分のやりたい研究ができるので、不安とワクワクが半分半分といった感じです。

おわりに

メソアメリカの考古学に興味を持ったのは学部生の頃でした。新大陸の考古学に興味を持つ日本の学生の多くが経験することかと思いますが、学部の際も修士の際も自分の興味関心を共有できる人や場は決して多くはありませんでした。アメリカの大学院に進学して良かったと思えることの一つは、この点にあります。デュレーン大学にはメソアメリカ考古学を専門とする学生が多く、また **Brown Bag**（昼食を持参して行われる研究発表会）や小規模な研究会が頻繁にあります。自分と似たような志を持つ学生が周りにいることで切磋琢磨し勉学に専念することができます。また、理論的な指導をしてもらえるということも、私がアメリカに来て良かったと思える点の一つです。修士までは地域研究に偏りがちで、理論的なことに関してあまり自信がなく、自分の研究を人類学的なテーマの中に位置づけることが苦手でした。そのため、人類学的考古学という伝統のもとに文化人類学や社会学の諸理論に基づいて研究を進めていくというスタイルを学ぶことは、自分の弱点を克服していく上でとても役に立っています。

最後にお金のことについて。アメリカの大学院の多くは生活費を支給してくれます。大学によって支給額や支給期間は異なりますが、デュレーン大学では学費の全額免除と保険料の半額免除に加え5年間の生活費が支給されます。大学が学生にお金を払って勉強する場を提供するという、日本人からするとなんとも不思議なシステムです。昨今インフレが続

くアメリカで決して贅沢な暮らしはできませんが、一人で暮らすには十分な額の生活費が支給されます。また、学会の参加費用や小規模の調査費であれば学内の助成金で賄うこともできますし、留学生が応募できる外部研究費も数多く存在します。金銭面については大学によって大きく異なるので一概には言えませんが、独身であればお金を理由に留学を躊躇する必要はないかと思います。

長々と個人的な経験を語りましたが、私はアメリカの大学院が日本の大学院よりも「優れている」と言っているわけではありません。どちらにも一長一短があるのかと思います。しかし、私と同じような悩みがある、もしくは厳しい環境で勉強してみたいと思うことがあればアメリカ留学を選択肢に入れてみても良いのではないのでしょうか。留学後はもちろんですが、留学についていろいろと調べる過程においてもたくさんの貴重な出会いがあり、それだけでも十二分に行動する価値があります。このエッセイが留学を志す学生に少しでもお役に立てれば幸いです。

¹ 松本雄一 2011年「アメリカでアンデス考古学を学ぶ」『古代アメリカ学会会報』第30号、pp.8-10。

² 松本剛「アメリカ留学を志す方々へ」、特集：古代アメリカを海外で学ぶ。古代アメリカ学会ウェブサイト <https://americaantigua.org/info/feature/>（参照 2022年5月31日）。

●イギリスでの古代アメリカ研究

久保山和佳（東北大学東北アジア研究センター 学術研究員）

はじめに

筆者は、2018年9月から2022年5月までイギリスのサウサンプトン大学人文学研究科に所属し、博士号を取得した。本稿では、筆者がイギリスで行っていた研究活動について簡単に紹介する。また、これから留学や海外での研究を目指す学生の参考になるように、留学準備や学生生活について報告する。

留学に至った経緯と留学準備

筆者は、早稲田大学の修士課程に在籍していた2016年から現在まで、先史コスタリカの石製ペンダント（500BC-AD900）に関して、形態学的・技術的側面の研究を行ってきた。

現在日本には、中米南部の考古学を専門とする研究者が少なく、その中でも、コスタリカ考古学を専門とする教授や研究室は日本にない。そのため、筆者は修士課程に入学した当初から、博士課程の進学先に悩んでいた。その頃に参加した国際学会 Society for American Archaeology において、アメリカとイギリスの研究者と今後の研究活動に関して話す機会があり、整った研究環境と多角的指導が魅力のイギリスの大学で方法論や理論を中心に学び、アメリカやコスタリカの研究者の協力の下、コスタリカ考古学や地域特有の事象に関して補足的に学ぶことに決めた。

イギリスの博士課程では、学生の研究対象に合わせた方法論や理論を総合的に指導するため、受験者と指導教授の研究対象地域・遺物が異なる場合でも、研究内容が指導教授の目に留まれば、研究室へ受け入れてくれる。筆者は、イギリス国内でメソアメリカ考古学や石製品研究、実験考古学を専門とする複数の教授に直接連絡をし、自身の研究について議論する中で志望校を決め、受験した。受験時には、履歴書や研究計画書、研究成果を提出する他、IELTS 試験で決められた点数を獲得することが最低条件であった。

最終的には、サウサンプトン大学に留学を

決めた。サウサンプトン大学で指導教授を務めていただいたアンドリュー・ジョーンズ教授（現ストックホルム大学教授）は、アイルランドや北欧の石製品を中心とする先史美術や物質文化の研究理論や実験考古学の手法に熟知している。また、考古学と芸術分野との共同研究にも取り組んでおり、筆者の研究における関心事項と合致していた。同大学およびイギリスには、コスタリカ考古学を専門とする研究者が居ないため、米国カンザス大学人類学部のジョン・フープス教授に学外アドバイザーと博士論文の主査を依頼することになった。

イギリスでの博士課程と研究活動

イギリスの博士課程では、指導教授との論文構想ミーティングの他は必修科目や履修単位に関する決まりがなく、興味のある授業や発掘、セミナーなどに「聴講生」として参加する。

また、サウサンプトン大学では博士課程の学生は毎年行われる学内学会において、進級審査を兼ねた研究発表と学会運営が義務付けられていた。このように、博士課程では研究における自主性と主体性が評価され、研究の進捗度合いによって年度末の進級の可否が決められていた。

サウサンプトン大学の考古学研究室は規模が大きく、常勤の教員・研究員だけでも54名が在籍している。また、博士課程の学生の半分以上が欧州を中心とする外国人であり、研究対象・地域は様々である。そのため、学内学会では多様な分野からの意見を聞くことができた。

筆者は博士論文の執筆に向け、イギリス留学中も毎年コスタリカの現地博物館（ヒスイ博物館およびコスタリカ国立博物館）における資料調査を実施し、収蔵品の顕微鏡やデジタル画像分析を活用した遺物観察・分析を行なった。また、サウサンプトン大学の考古学研究室では、学部生や院生を交えて、石製



写真 1 サウサンプトン大学考古学研究室
(撮影：久保山)

ペンダントの復元製作実験プロジェクトを行った。普段の考古学研究室は個人主義で、学生・研究者同士がお互いの研究について話すような場が少なかったが、筆者は研究室内で実験や観察などをしていた為、通りすがりの研究者や学生が興味を持って見学をしに来ていた。特に、ヨーロッパの石器や先史美術を専門とする研究者達からの意見は、これまでにない視点からの研究手法や解釈に繋がった。

研究以外の活動としては、サウサンプトン大学芸術学部で考古学・デジタルアートプロジェクトに参加し、文化財の分析に用いられるデジタル画像分析 RTI (Reflectance Transformation Imaging) を活用した作品製作プロジェクトに参加した。この経験から、将来的には考古学の普及と教育を、芸術分野との融合という新しい試みによって実践したいという長期的な目標を見つけることができた。また、2019年の夏には *Living with Monuments Project*¹⁾に参加し、エーヴベリー (Avebury) 遺跡内の新石器時代から青銅器時代の遺構での発掘調査を行った。このプロジェクトは、サウサンプトン大学、ケンブリッジ大学、レスター大学、ナショナル・トラストなどの共同研究であり、1ヶ月間のキャンプ生活を通して国内外の他大学の学生と交流した。以上のように、自身の研究にかかわらず課外活動に積極的に参加したことで、充実した研究・学生生活となった。

研究における COVID-19 の影響

最後に、博士課程における COVID-19 の影響と対策について報告する。筆者は、博士課程の終盤にあたる 2020 年に、在学していたイギリスのサウサンプトン大学から、調査のために渡航していたコスタリカで COVID-19 のパンデミックを経験した。当初、コスタリカ国内で石材採石地点における踏査と先住民職人へのインタビューを含めた民族学的研究を予定していたが、移動制限の厳格化に伴い調査計画の大幅な変更を余儀なくされた。そこで、イギリス帰国後も行える遺物観察を調査の根幹に置き換え、遺物のシリコン・レプリカを迅速に採集することでデジタル画像解析等の遺物研究に主軸を切り替えた。帰国後はサウサンプトン大学の研究室で製作実験や顕微鏡観察など、一人で行える研究に取り組んでいたが、感染状況のさらなる悪化によりイギリスでの研究活動継続が困難となったため、2021年の春には博士論文執筆のため研究拠点を日本へ移した。その際には、東京都立大学の考古学研究室へ機材の使用・研究室の貸し出し依頼し、博士論文を仕上げた。この留学を通して、コロナ禍だけでなく、不安定な政界情勢が続く中で海外において研究を継続する為には、状況に応じて臨機応変に研究を遂行する姿勢が必要不可欠であることを学んだ。

2022年1月に行われた筆者の博士論文審査は、日本、イギリス、アメリカからのオンラインにて実施された。3カ国からの参加ということで、日本時間午前2時から4時までという過去最も早い時間帯での審査会となった。しかし、オンライン実施だからこそ、イギリスだけでなくアメリカからも審査員を招くことができたという点で大変有意義な審査会であった。

おわりに

サウサンプトン大学の博士課程に入学した当初は、研究テーマに悩み、思うように研究が進まないこともあった。筆者も含め、多くの博士課程留学生在がカルチャーショックと研究への不安から、ストレスを溜めるといふ。筆者の場合、引き籠りがちであった1年目の

終盤に危機感を感じ、ハイキングや合唱のクラブに所属することで、意識的に外出することを心がけた。クラブ活動では、他学科の博士課程の学生達とも仲良くなり、お互いに研究面での不安を打ち明け、気分転換に旅行や食事に出かけることもでき、心の支えとなった。このように、研究以外の所で作られるネットワークの重要性を感じた。

これから海外へ留学・研究へ行く学生には、

短期間で出来るだけ沢山の経験をするために、意識的に行動することをお勧めしたい。

¹<https://www.southampton.ac.uk/archaeology/research/projects/living-with-monuments.page>

●マンガで開く中南米研究のとびら—アンケート調査を通じた教育者と学習者の対話—

小林 貴徳（専修大学）

1. 問題の所在

古代アメリカ学会では、研究成果を学校教育へ還元しようとする姿勢を積極的に示してきた。2009年以降、高校の世界史科目で用いられる教科書の内容の検討および改善が提案され、教材を通じた正確な知識の発信が進められたし、2015年からは、古代アメリカに関する知識を活用した学習方法を教育の場の実装する試みが提案されてきた。社会とどのように関わるかという問題提起とそれへの具体的な応答を図るその姿勢は、現代社会における学会のあり方を見直すとする極めて重要な道筋を示したといえる。

こうした地道な取り組みによって、中等教育における古代アメリカに関する情報は学術的により正確になり、研究成果を応用した教育が進められるだろうと期待された。しかし筆者が大学生を対象として実施したアンケート調査¹の結果によると、高校で世界史科目を学んだ学生の反応は冷ややかなものと言わざるを得ない。

高校で学んだ世界史科目の印象を問うた設問では、「好き／得意」と答えた学生数 75 名（49%）に対し「嫌い／苦手」と答えた学生数は 73 名（47%）にのぼり、世界史科目の評価は真っ二つに割れた。世界史科目に対するネガティブな評価として挙がる大半の理由は「覚えることが多すぎる（32件）」「カタカナが苦手（28件）」が占め、そのほか「日本と関わっていない部分を覚えるのが難しかった」「親近感がなかった」などの意見もみられた。「先生が淡々と教科書内容を板書して説明するのみで興味をそそらなかった」「授業が退屈でつまらなかった」「世界史の先生があまり面白くない授業スタイルだったから」といった教授法に関する批判の声がある一方、「暗記など勉強目的の学習ではなく、趣味や教養目的の学習であれば楽しめる」という意見があったのは興味深い。なお、高校の授業で中南米について学んだと回答した学生は 48 名²であり、全体の 2/3 以上の学生は高校で中南米について学んでいない（あるいは記憶に

残っていない）ことになる。大学での中南米の文化や歴史に関する講義後に「初めて知りました！中南米地域って面白いですね」といった学生の反応が多いのにはこうした背景があるらしい。

学生の声に耳を傾けると、世界史科目のなかでも大学入試対策で重視されない単元は、いとも簡単に省略されたり、最小限の解説に留められたりしているように思われる。学会側で、いくら教科書内容の改善を積極的に働きかけ、実際に出版社が教科書を改訂し、さらには、研究成果を応用する授業内容の提案を試みたところで、残念ながら、その努力が学校教育の場に十分に届いているとはいえないようだ。

2. 学校の外にある学びの場

こうした現状を踏まえると、学校教育にばかり期待しては、わが国の青少年のあいだで古代アメリカに関する知識はおろか興味そのものを引き出す機会すら生じないのではないだろうか。そこで本学会では、これまでの取り組みからもう一步ふみこみ、古代アメリカに親しむ場を学校外に見出そうとする試みを企画した。2021年12月に2日に分けて開催された公開シンポジウム「まなぶ、たのしむ南北アメリカの古代文明—研究成果から学びの場へ—」では、考古学者や歴史学者のほか、学習マンガや画文業の専門家をパネリストに迎え、研究成果を広く社会に発信する方法やメディアの可能性について議論をおこなった。

シンポジウム1日目のディスカッションでは、「これまで研究成果を正しく伝えることに重きを置いていたけれども、むしろ興味を持ってもらうためには学説と一般の人たちが持っているイメージの間にズレがあってもいいじゃないか、むしろそういったことを利用して興味を持ってもらうことの方が重要ではないか」（古代アメリカ学会 2022:p.2）と問題提起された。これに続くシンポジウム2日目でも「謎とか不思議とい

うのは、興味を持ってもらう入り口としていいんだ」といった意見にくわえ、アニメやマンガ、ゲームも含め、それらメディアをきっかけとして古代アメリカに興味をもつようになるのではないかとの展望が示された(前掲書:pp.32-33)。

アニメやマンガといったポピュラーカルチャーは、学校の外側で、それも若年層に限らず、老若男女を問わず日常生活におおきな影響力をもつ。いまや日本を代表する産業に成長したマンガは、戦後、とりわけ手塚治虫によるストーリーマンガの登場以降、子どもや青少年を中心として幅広い世代に受け入れられた。SFマンガや歴史マンガなどジャンルの多様化にともない、また、1970年代のオカルトブームや考古学ブームの波にも押され、作品の舞台やテーマに古代アメリカの遺跡や遺物が扱われる機会が増えていった。世界史や日本史を扱ったシリーズが複数の大手出版社から送り出され学習マンガブームに火がついたのも1980年代だった。

現在の大人が子どもだったころ、日本社会は幾度かのマンガブームを経験していた。インターネットもなく、海外旅行もいまほど大衆化していない当時の子どもたちにとって、異文化と出会い、異世界に興味を抱くきっかけとなったのが、マンガやそれと並行して人気を博したアニメだった。

ようやくここで本稿の主題にはいることになる。以下、本稿では、2021年10月に実施した本学会員を対象に実施したアンケート調査の結果にもとづき、幼少期におけるポピュラーカルチャーの経験がその後に影響を及ぼしうること、また、ポピュラーカルチャーが教育や学習機会の動機付けに役立つという展望を示してみたい。

3. アンケート調査の概要

文化遺産国際協力コンソーシアム³との共催で実施したアンケート調査は、以下の説明文とともに調査対象となる本学会員148名にアンケート票が送信された。⁴

わが国において、マンガやアニメなどポピュラーカルチャーは、中南米の遺跡、歴史、文化遺産を知るきっかけとしてどのように作用してきたのかを探ることを目的とする。このためアンケー

ト調査を実施し、中南米地域に強い関心を示す研究者、学生、愛好家を対象として、これまで(とくに幼少期)に触れた(見た、読んだ)ことのあるポピュラーカルチャー作品と遺跡、歴史、文化遺産との関わりを探る。

アンケート票は、以下に示す通り、ポピュラーカルチャーの経験を問う5つの設問と、ポピュラーカルチャーの活用について問う2つの設問で構成された。

〈設問1〉これまで(とくに幼少期)、遺跡、歴史、文化遺産が扱われた(登場した)ポピュラーカルチャー作品に触れた(見た、読んだ)経験はあるか。(複数選択形式)

〈設問2〉設問1のジャンル選択で「その他」選択した場合に記述(自由回答形式)

〈設問3〉設問1の回答に基づき「作品名」を記述(自由回答形式)

〈設問4〉設問1で「経験がある」を選択した場合、もっとも印象深い作品名とその作品に触れたときの印象はなにか。(自由回答形式)

〈設問5〉設問1で「経験がある」を選択した場合、その作品に触れたことがキャリア形成や趣味にどのような影響を及ぼしたと考えるか。(自由回答形式)

〈設問6〉ポピュラーカルチャーは教育や学習機会、研究活動の動機付けに役立つと考えるか。(選択形式)

〈設問7〉設問6にてポピュラーカルチャーを「すでに活用している」を選択した場合、どのように活用したか。(自由回答形式)

4-A. ポピュラーカルチャー作品の経験

ポピュラーカルチャー作品をつうじて古代文明や歴史、文化遺産に触れた経験を問うた設問群の回答を、世代別、ジャンルごとにまとめたのが表1である。サンプル数が多くないためあくまでも傾向をつかむにすぎないが、マンガ、アニメ、映画ともに中南米地域を扱った作品に触れたことがある件数が中南米地域以外の作品に触れた件数と同数、あるいはそれ以上の値を示している。同様の設問を別の機会⁵に大学生に投げかけてみたところ、表2が示すように、中南米地域を扱った作品に触れたことがある

という回答は、中南米地域以外の作品に触れた件数に遠く及ばない。また、世代別にいえば、40歳から50歳代にかけて中南米地域を扱ったマンガ・アニメ作品に触れた経験の比率がやや高く、他方、大学生の回答からは映画やTV番組をつうじて中南米地域に触れた経験が多いように思われる。

設問3で問うた作品名として、マンガで20タイトル、アニメで11タイトル、映画で13タイトルが挙げられた。世代をまたいで言及される作品は、浦沢直樹のマンガ作品『MASTERキートン』（全18巻、1988-1994年）、テレビ朝日系列のアニメ作品『アンデス少年ペペロの冒険』（全26話、1975-1976年）、NHKが放送したスタジオぴえろ制作のアニメ作品『太陽の子エステバン』（全39話、1982-1983年）、藤子・F・不二雄原作の長編アニメ映画『ドラえもん のび太の太陽王伝説』（2000年、制作：シンエイ動画、配給：東宝）だった⁶。

4-B) もっとも印象深い作品とその影響

これに続く設問4では、もっとも印象深い作品名とその印象について次のような回答が寄せられた。

- 『MASTERキートン』：世界を旅して文明を研究してみたいと思った。

- 『ジャングルにきえたマヤ』⁷：初めてマヤ文明に触れ、もっと知りたいと思った。
- 『太陽の子エステバン』：ワクワクして行きたいと思った。
- 『母を訪ねて三千里』⁸：あの町並みを歩きたいと思った。
- 『ドラえもん のび太の太陽王伝説』：古代文化に興味を持った。

さらに設問5の回答によると、ポピュラーカルチャー作品に触れた経験がその後のキャリア形成や趣味に与えた影響は次のように示される。

- 『太陽の子エステバン』、『アンデス少年ペペロの冒険』：マイナーな歴史に興味を持てた。中学に入ってから見てもっと勉強したくなり、中高で歴史の成績が全国で1番になった。生涯ペルーに興味を持つきっかけのひとつになった（50歳代）
- 『太陽の子エステバン』：興味のきっかけになった。アニメではよくわからなかったのもっときちんと知りたいと思い、大学は史学科を選んだ（40歳代）
- 『太陽の子エステバン』歴史に関わる仕事につきたいと思うきっかけとなった（40歳代）

設問1：これまで遺跡、歴史、文化遺産が扱われたポピュラーカルチャーに触れた経験はありますか

	中南米地域の作品に触れた						中南米以外の作品に触れた						経験がない／憶えていない					
	~30代 (n=10)	40代 (n=18)	50代 (n=11)	60代 (n=2)	70代~ (n=1)	小計 (n=42)	~30代 (n=10)	40代 (n=18)	50代 (n=11)	60代 (n=2)	70代~ (n=1)	小計 (n=42)	~30代 (n=10)	40代 (n=18)	50代 (n=11)	60代 (n=2)	70代~ (n=1)	小計 (n=42)
マンガ	2	6	5	0	0	13	4	6	2	0	1	13	4	6	4	2	0	16
アニメ	2	9	5	0	1	17	5	2	0	0	0	7	3	7	6	2	0	18
映画	5	8	6	0	1	20	3	4	2	1	0	10	2	6	3	1	0	12
ゲーム	1	4	1	0	0	6	3	1	1	0	0	5	6	13	9	2	1	31
その他*	2	4	1	0	1	8	1	2	2	0	0	5	7	12	8	2	0	29
計	12	31	18	0	3		16	15	7	1	1		22	44	30	9	1	

表1 遺跡、歴史、文化遺産が扱われたポピュラーカルチャーに触れた経験（本学会員）

	中南米地域の作品に触れたことがある				中南米以外の作品に触れたことがある				経験がない／憶えていない			
	男性(n=66)	女性(n=88)	小計(n=154)	比率(%)	男性(n=66)	女性(n=88)	小計(n=154)	比率(%)	男性(n=66)	女性(n=88)	小計(n=154)	比率(%)
マンガ	3	2	5	3.2	15	21	36	23.4	48	65	113	73.4
アニメ	4	3	7	4.5	16	19	35	22.7	46	66	112	72.7
映画	23	29	52	33.8	9	12	21	13.6	34	47	81	52.6
ゲーム	9	3	12	7.8	12	13	25	16.2	45	72	117	76.0
TV番組	23	32	55	35.7	7	14	21	13.6	36	42	78	50.6
その他*	2	7	9	5.8	3	4	7	4.5	61	77	138	89.6

表2 遺跡、歴史、文化遺産が扱われたポピュラーカルチャーに触れた経験（大学生）

- 『太陽の子エステバン』: 自分が触れている世界とは違う世界が、歴史上あるいは地球の別の場所にあることを知り、それらについて知りたい、触れたいと思うようになったことが、現在の職業や自身のパーソナリティ形成に影響を及ぼした(40歳代)
- 『MASTER キートン』: 文明を研究し、その成果を教育現場へ還元しようとする教員の仕事につながっている(40歳代)
- 『モンタナ・ジョーンズ』⁹: 考古学を学びたいというきっかけになり進学に影響を与えた(30歳代)
- 『ドラえもん のび太の太陽王伝説』: 中南米考古学に興味を持つきっかけになり、現在のキャリア(南米考古学の研究者)に繋がった(30歳代)
- 『ドラえもん のび太の太陽王伝説』: メキシコに行きたいと思った(30歳代)

件数としては決して多くないものの、こうしたコメントをみるかぎり、ポピュラーカルチャーを通じた中南米地域や古代文明への接近という幼少期の経験や記憶は、現在の学术界を牽引する研究者や、古代アメリカに関する学術研究の推進、学者相互の交流を図る本学会の構成員にとって重要なきっかけになっていたといえそうだ。

4-C) ポピュラーカルチャーは学びに役立つか

設問6では、ポピュラーカルチャー作品の活用の可能性について、それぞれ学校教育、授業外(生涯)学習、研究活動という項目ごとに回答を募った(表3)。学校教育では「積極的に活用したい」「大いに役立つ」の和が40%であり、授業外(生涯)学習にいたってはそれらの和が48%に達した。注目したいのは、学校教育と授

業外(生涯)学習で「まったく役に立たない」との回答がゼロだった点、また、全項目で「使い方しだいで役立つ」とする回答がもっとも多くを占めていた点である。

「使い方しだいで役立つ」とはどのような活用法が想定されるのだろうか。その一例について設問7では、設問6で「既に活用している」と答えた回答者に具体例を記してもらった。

〈学校教育での活用事例〉

- アニメや映画などで描かれる考古学に関するものを授業で示している(50歳代)
- ストーリーがあると知識が定着しやすいと思い、授業のスライド資料で利用している(40歳代)
- 『モーター・サイクル・ダイヤリーズ』¹⁰などの映画を授業で鑑賞している(40歳代)
- 野内与吉の移民の話のマンガやラテンアメリカを扱った映画を授業の補助教材として利用している(40歳代)
- 『世界ふしぎ発見!』やNHKのドキュメンタリー番組のマチュピチュやナスカの地上絵の回は授業で紹介する(40歳代)

〈授業外(生涯)学習での活用事例〉

- 同好者とのメーリングリスト配信や講座時に関係資料の配付(70歳代)
- 勤務先でのイベント(映画会)の企画(60歳代)
- 土器の図像をもとにキャラクターを作り、それを使って市民講座でレクチャーした(50歳代)
- 講演会で興味の入りの口としてマンガを紹介している(40歳代)

学校教育の内外でポピュラーカルチャーを活用するさまざまな工夫が試みられているものの、「積極的に活用したい」「大いに役立つ」あるいは「使い方しだいで役立つ」の回答数を考

設問6: ポピュラーカルチャーは教育や学習機会、研究活動の動機付けに役立つと考えますか

	学校教育						授業外(生涯)学習						研究活動					
	~30代 (n=10)	40代 (n=18)	50代 (n=11)	60代 (n=2)	70代~ (n=1)	小計 (n=42)	~30代 (n=10)	40代 (n=18)	50代 (n=11)	60代 (n=2)	70代~ (n=1)	小計 (n=42)	~30代 (n=10)	40代 (n=18)	50代 (n=11)	60代 (n=2)	70代~ (n=1)	小計 (n=42)
1. まったく役に立たない	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	17%	9%	0%	0%	10%
2. 使い方しだいで役立つ	30%	44%	73%	50%	0%	48%	40%	33%	55%	0%	0%	38%	60%	56%	64%	50%	0%	57%
3. おおいに役立つ	40%	11%	9%	50%	0%	19%	20%	22%	27%	50%	0%	24%	20%	6%	9%	50%	100%	14%
4. 積極的に活用したい	30%	22%	9%	0%	100%	21%	40%	28%	9%	0%	0%	24%	20%	11%	9%	0%	0%	12%
5. 既に活用している*	0%	22%	9%	0%	0%	12%	0%	17%	9%	50%	100%	14%	0%	11%	9%	0%	0%	7%
平均評価	3.0	3.2	2.5	2.5	4.0		3.0	3.3	2.7	4.0	5.0		2.6	2.4	2.5	2.5	3.0	

表3 ポピュラーカルチャー作品は教育、学習、研究の動機付けに役立つか(本学会員)

えると、実際に活用している比率は10.9%にとどまる。なお、ポピュラーカルチャーを「すでに活用している」と答えた14名の回答者のうち13名(93%)が設問1にて「中南米に関するポピュラーカルチャーに触れた経験がある」と回答している。やはり、幼少期における経験は、教育者の立場になったときに活用法をイメージしたり、実際の取り組みの動機付けとして作用するのかもしれない。

5. ポピュラーカルチャーとその時代背景

アンケート調査に協力してくれた回答者の平均年齢(41.9歳)からすると、単純に過ぎるかもしれないが、その幼少期として1970年代から1980年代が想定される。1970年代といえ、1960年代に創刊された『少年マガジン』(1962年創刊)、『少年ジャンプ』(1968年創刊)、『少年チャンピオン』(1968年創刊)など少年誌をはじめマンガ産業が拡大の一途をたどった時代である。ジャンルの多様化が進んだが、注目すべきは近未来や古代、異世界を扱ったSF作品の急増だろう。

1970年代には、ユリ・ゲラーのスプーン曲げに代表される超能力ブーム、ノストラダムスの大予言と終末論、ジェームズ・チャーチワードの『失われたムー大陸』(1968年、大陸書房)に端を発する超古代文明ブーム、ネッシーや雪男など未確認生物UMAやUFO目撃譚のように、よくわからないもの、いわばオカルトに対する熱が日本社会で高まっていた。子どもたちはツチノコ探しに夢中になり、大人は映画『エクソシスト』(1974年日本公開)や『日本沈没』(1973年)に心を奪われた。また、高松塚古墳の極彩色壁画の発見(1972年)により国内は古代史・考古学ブームに沸いていた。

その時代、海外旅行の大衆化も急速に進んだ。1964年の海外渡航自由化とそれともなあってパッケージツアーが誕生し、1970年にはジャンボジェット機が導入された。海外旅行は夢物語ではなくなり、海外渡航熱の高まりは第一次海外旅行ブームと呼ばれた。さらに1980年代にはプラザ合意による円高を背景に第二次海外旅行ブームがおきた。そうした海外への関心が呼び水となり、古代アメリカを紹介する展覧会がほぼ毎年のように、しかもその多くが博物館で

はなく、百貨店を会場にして開催されていた¹¹。

TV番組にも同じような流行がみられた。たしかにTBS系列の長寿番組『兼高かおる世界の旅』(1959-1990年)や日本テレビ系列の『日立ドキュメンタリー すばらしい世界旅行』(1966-1974年)が放映されていたが、1980年代にはフジテレビ系列のクイズ番組『なるほど!ザ・ワールド』(1981-1996年)や、1986年に放送開始されたTBS系列の番組『日立 世界・ふしぎ発見!』のように、ドキュメンタリーというよりも世界の奇習や異文化、歴史や遺跡を紹介するバラエティ枠のクイズ番組が好評を博していった。前述の『太陽の子エステバン』や『アンデス少年ペペロの冒険』の放送開始もまさにこの時代である。TBS系列の番組『世界遺産』の放送開始が1996年であることを考えると、こうしたバラエティ番組やアニメ作品は、当時の子どもにとって異文化と出会い、異世界を知る数少ない機会のひとつだったはずである。

オカルトブームと海外旅行ブームを背景としつつ、少年誌や青年誌のみならず、少女誌にいたるまでマンガ作品に古代アメリカの遺跡や遺物をモチーフにする作品が増えた¹²。それと同じ時代、小学館、学研、集英社、中央公論社など大手出版社から学習マンガシリーズが次々と刊行され、子どもたちはそれらの作品を通じて日本史や世界史、偉人の伝記に対する関心の扉を開いていったことも忘れてはならない。

ところが、学校教育の外で世界史を知る(学ぶ)重要なメディアであるはずの学習マンガシリーズについて、学会員を対象としたアンケート調査ではほとんど言及されなかった。むしろ、少年マンガや少女マンガのカテゴリーにある作品ばかりが目立つ。マンガの学習内容とストーリーの記憶を分析した向後(1998)が指摘する、マンガによる「長期記憶保持の効果」や、社会科学歴史学習におけるマンガ活用の可能性を探る河合(2011)がいうところの「深い思考を促す効果」が十分に発揮されるには、学習内容部分もさることながら、ストーリー部分の面白さが読み手の理解や記憶にとって重要なかもしれない。となると、歴史的事実や教科書に忠実に対応した内容で構成される学習マンガよりも、少年マンガの面白いストーリー展開に登場する「神秘的な」遺跡や「謎の」遺物のほうが記憶

に残りやすかったといえるだろう。

6. 学習者視点からの検証

ここで改めて前節で挙げた題目のひとつ、「ポピュラーカルチャーは使い方しだいで役立つ」を議論の俎上に戻したい。冒頭で紹介した大学生を対象としたアンケート調査では、ポピュラーカルチャーが学習の動機付けに役立つかどうかについても設問を立てていた（表4）。

ここではマンガ、アニメ、映画、ゲームの4項目に分けて意見を求めたが、「積極的に活用してほしい」と「おおいに役立つ」の和はマンガで63%、アニメで67%、映画にいたっては71%の回答者がかなり肯定的な意見を有していることが分かる。やはり「使い方しだいで役立つ」という回答が一定程度認められるが、前述の教育者側の視点に比べるとその差は明白である。ちなみに「使い方しだい」とはどのような活用のされ方なのだろうか。そこで、「既に活用された」と回答した10%前後の回答者の記述から探ってみよう。

〈高校での活用事例〉（科目ごとに記載）

- 世界史の授業で先生が授業内容に関するマンガや映画を紹介してくれた。
世界史の先生が『ヘタリア』¹³など歴史に関わるマンガを紹介した。
- 日本史担当の教員がジブリ作品の『もののけ姫』を戦国時代の副教材として紹介していた。
日本史の授業でNHKの歴史の再現ドラマを教材として使った。
- 古典の授業で『キングダム』¹⁴を用いて関係をまとめていた先生がいた。
古文の授業で『うた恋い』¹⁵を視聴して平安文化について学んだ。

古典の授業で源氏物語を扱った際、先生にマンガの『あさきゆめみし』¹⁶を勧められ読んだ。

- 現代文の授業では『進撃の巨人』¹⁷を、科学の授業では『はたらく細胞』¹⁸などを用いた。
- 生物の先生が『はたらく細胞』というアニメから人間の体内の働きを教えてくれた。
生物で『はたらく細胞』をみながら生物に関する単語やその役割などを学んだ。
- 英語の先生が自然できれいな発音を聞くためにディズニーの映画を使った。
- 修学旅行の事前学習で『はだしのゲン』のアニメを見た。

全回答者の1割程度であるものの、異なる教科でポピュラーカルチャーが活用されている様子がうかがえる。どのような頻度で用いられたのかはともかく、かつてのようにマンガやアニメが学校教育の現場から排除すべきメディアというわけではなく、授業内容の理解を助ける補助資料としてそれらの積極的な活用を意図する教育者が増えてきたということだろうか。

学校教育での教材としてのポピュラーカルチャーの活用を提案する町田は、ポピュラーカルチャー作品は、教材として成立するかしないかという、ぎりぎりの境界線上にあると指摘する。町田がいう「境界線上の教材」とは、現時点においては教材と成り得るけれども、慎重に取り扱わなければ教材とはいえないものになるという意味である（町田2011）。それはまさにポピュラーカルチャーは「使い方しだいで役立つ」と回答した教育者側と学習者側が共有する関心ごとといえよう。

	マンガ		アニメ		映画		ゲーム	
	人数(n=154)	比率(%)	人数(n=154)	比率(%)	人数(n=154)	比率(%)	人数(n=154)	比率(%)
1. まったく役に立たない	1	0.6	1	0.6	1	0.6	3	1.9
2. 使い方しだいで役立つ	34	22.1	31	20.1	21	13.6	56	36.4
3. おおいに役立つ	41	26.6	45	29.2	49	31.8	30	19.5
4. 積極的に活用してほしい	57	37.0	58	37.7	63	40.9	50	32.5
5. 既に活用された*	18	11.7	16	10.4	17	11.0	12	7.8
無回答	3	1.9	3	1.9	3	1.9	3	1.9
平均評価	3.4		3.4		3.0		3.1	

表4 ポピュラーカルチャー作品は学習の動機付けに役立つか（大学生）

7. まとめと展望

2022年度から高校の学習指導要領の改訂が実施される。社会科目に新設される「地理総合」「歴史総合」が必修科目となり、学習者は、発展的な学習科目である「地理探求」「日本史探求」「世界史探求」から1科目を選択することになる。「歴史総合」科目の教科書に記載される古代アメリカに関する内容については多々良(2021)が紹介しているように、本学会のこれまでの取り組みの成果が反映された教科書も多い。とはいえ、世界史と日本史の相互関連性を重視しつつ、近現代史の理解を中心に据えた「歴史総合」ではアメリカ大陸の古代史にどれほど授業時間を割くことができるのか期待できるものではない。

高等学校学習指導要領によると、「世界史探求」は、「歴史総合」の学習を踏まえ、世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について、地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解するとともに、事象の意味や意義、特色などを考察し、よりよい社会の実現を視野に、歴史的経緯を踏まえて、地球世界の課題を探究する科目である(文部科学省 2018)と壮大な展望が示される。教育の最前線に立つ多々良は、2021年のシンポジウムで学習指導要領改訂に関して次のように述べていた。

この世界史探究を見ますと、思考力の育成がすごく大事です。それから4単位から1単位減の3単位が標準単位となりますから、いろんな知識をどんどん紹介をしていくことはできなくなってくる。そうすると詳しい説明は困難で、思考する材料をうまく見つけるというようなこととなります(多々良 2022)。

社会科目の改訂により、いままで以上にさまざまな資料を参照しながら、限られた授業時間内に学習者の思考力や問題解決能力を伸ばす工夫が教育者に求められるだろう。そんな変化の局面であるからこそ、ポピュラーカルチャーの活用を視野に入れてよいかもしれない。使い方しだいでは、学習者の興味を引き出したり、学習者に親近感を与えたり、あるいは、長期記憶保持や深い思考の促進という効果を期待することもできるのである。

教育者が抱く「使い方しだいで役に立つ」という意見と学習者が訴える「積極的に活用してほしい」をうまく連結させられるかどうかは鍵となるのだが、そこにはひとつどうしても解決しなければならない問題がある。マンガやアニメなどポピュラーカルチャーにあまり馴染みがない教育者の場合、そもそもどのような作品があり、何がどう扱われているのか知らないし、他方、学習者にとっても、親の世代が子どもだった頃のマンガ作品を知る機会がないのである。

昭和から平成にかけて成長し続けたポピュラーカルチャー産業では、日本経済の景気動向に合わせ、また、生まれては消えていく幾多のブームを背景にして、数えきれないマンガやアニメ作品が世に送り出された。そうした作品群にいま一度光を当て、学びでの活用に資する教育資源とみなす必要がある。具体的にいえば、例えば、どの作品で何がどのように描かれているのかについてまとめ、参照可能なデータベースを作成する取り組みである¹⁹。研究者や専門家は、ポピュラーカルチャー作品が含む誤認や間違いのあら捜しや批判に終始するのではなく、専門家ならではの視点で「この点はマンガ的演出であり学説とは異なる。最新の学説によると…」や「この場面は〇〇期の建造物より着想したようだ」のような解説の補足など、寛容な姿勢でポピュラーカルチャーに歩み寄ることが求められるだろう。

参考文献

河合秀将

2011 「マンガを活用した社会科歴史学習の研究」『探求』No.22、pp.54-60、愛知教育大学。

古代アメリカ学会

2022 『古代アメリカ学会主催第3回公開シンポジウム講演録』2。

多々良穰

2021 「高等学校『歴史総合』の教科書に見られる古代アメリカの記述」『古代アメリカ学会会報』Vol.46。

2022 「メソアメリカ教育の実践」『古代アメリカ学会主催第3回公開シンポジウム講演録』2。

町田守弘

- 2011 『楽しく、力のつく』国語教育の創造—
学習者の『いま、ここ』を見つめて—
町田守弘編『明日の授業をどう創るか—
学習者の「いま、ここ」を見つめる国語
教育』、三省堂。

向後智子・向後千春

- 1998 「マンガによる表現が学習内容の理解と保
持に及ぼす効果」『日本教育工学雑誌』22
巻、2号。

文部科学省

- 2018 『高等学校学習指導要領解説：地理歴史編』、
文部科学省。

¹ 2022年1月12～13日および6月9～10日に実施。
アンケート票の回収率は91.1%（配布対象者169名
のうち154名が回答）であり、本調査で得られたデ
ータの信頼度は95%、許容誤差は5%以下に収まる。

² 中南米地域について学んだと答えた学生48名の
うち38名が世界史科目で、4名が地理科目で扱われ
たという。その内容について、古代文明を習ったと
いう回答は8件であり、植民地期から近現代につい
て習ったという回答9件を下回った。

³ 文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会
では、活動テーマの一つに「文化遺産保護と活用現場
におけるマンガの導入」を盛り込み、これまで数度
の研究報告を重ねてきた。その一環として実施する
本調査は、教育や学習の動機付けに役立つツールと
してのポピュラーカルチャーに注目し、その活用の
実態を探るものである。

⁴ Google フォームで作成したアンケート票をメー
ルにて送信し、2021年10月17日～31日の2週間
を回答期間とした。統計学的に信憑性が保証される
水準（許容誤差：5%以下、信頼度：95%以上）を
得るためには、母集団148に対して108のサンプル
数（回収率72%）を目標としたが、実際に回収でき
たサンプル数は42（回収率28.4%）にとどまった。
そのため、調査で得られたデータは目標を下回る許
容誤差（10%以下）と信頼度（90%以上）となった。
アンケート回答にご協力いただいた本学会員の方々
にはこの場を借りて御礼を申し上げます。

⁵ 注1参照。

⁶ 映画『ドラえもん』についていえば、幼少期の経
験といえるのはせいぜい30歳代の回答者であり、
40歳代以上の回答者では家族同伴での視聴による

点が補足される。

⁷ たかしよいち原作／吉川豊作画のマンガ作品（世
界ふしぎ物語シリーズ全10巻、1991年、理論社）。

⁸ エドモンド・デ・アミーチス原作、高畑勲監督、
日本アニメーション制作。フジテレビ系列で放送さ
れたアニメ作品（全52話、1976年）。

⁹ マルコ・パゴット原作、今沢哲男監督、スタジオ
ジュニオ制作。NHKで放送されたアニメ作品（全
52話、1994-1995年）。

¹⁰ エルネスト・チェ・ゲバラ原作、ウォルター・サ
レス監督の映画（2004年、イギリス・アメリカ合作）。

¹¹ 1970年代には古代メソアメリカに関する展覧会
に限定しても、「マヤ文明展」（1970年、日本橋三越）、
「古代マヤ文明展：メキシコの密林にねむる謎」

（1972年、日本橋三越）、「アステカ文明展」（1974
年、小田急グランドギャラリー）、「未知の文明—マ
ヤ文明の至宝展」（1974年、伊勢丹新宿店）、「古代
マヤ文明展」（1977年、読売新聞社）、「メキシコ文
明展」（1978年、日本橋三越美術館）、「拓本 マヤ
の美」（1978年、国立国際美術館）が挙げられる。

¹² この時期、古代アメリカの遺跡や遺物が次のよう
な作品で登場する。『ザ・クレーター』2巻（手塚治
虫、1970年）、『三つ目がとおる』怪鳥モア編（手塚
治虫、1977-1978年）、『サイボーグ009』アステカ
編（石ノ森章太郎、1979年）、『ドラえもん』5巻（藤
子・F・不二雄、1974年）、『T・Pぼん』2巻（藤子・
F・不二雄、1981年）、『セーアカトルの日』（高橋
良子、1981年）、『インカ幻帝国』（高橋良子、1987
年）、『樹海の虜』（名香智子、1981年）、『ジョジョ
の奇妙な冒険』第1部（荒木飛呂彦、1987年）。

¹³ 日丸屋秀和による歴史コメディマンガ（現在まで
に6巻刊行、2008年-現在）。

¹⁴ 原泰久作の歴史マンガ（現在までに65巻、2006
年-現在）。

¹⁵ 百人一首を扱った杉田圭の短編マンガ（現在まで
に4巻刊行、2010年-現在）。

¹⁶ 源氏物語をマンガ化した大和和紀の作品（全13
巻、1979-1993年）。

¹⁷ 諫山創によるマンガ作品でジャンルとしてはダ
ーク・ファンタジー（全34巻、2009-2021年）。

¹⁸ 清水茜作のマンガ作品（全6巻、2015-2021年）。

¹⁹ マンガ作品のデータベース化の取り組みの詳細
については別の機会に報告したい。なお本稿は令和
4年度専修大学研究助成（共同研究）研究課題「日
本のポピュラーカルチャーに表象されるメソアメリ
カイメージの解明」の研究成果の一部である。

●アルフレド・ロペス・アウスティン先生（1936–2021）を偲んで

井上 幸孝（専修大学）



写真 1 アルフレド・ロペス・アウスティン先生
（2020年2月撮影）

2021年10月15日、メソアメリカの宗教・神話研究の第一人者で、メキシコ国立自治大学人類学研究所のアルフレド・ロペス・アウスティン先生（Dr. Alfredo López Austin, Instituto de Investigaciones Antropológicas, Universidad Nacional Autónoma de México）が鬼籍に入られた。過去に患った癌の骨転移の末のご逝去で、85歳だった。2019年10月のミゲル・レオン=ポルティージャ先生（享年93歳）、2021年3月のビクトル・マヌエル・カスティージョ・ファレーラス先生（享年88歳）に続き、私たちはメソアメリカ史研究の巨星を失った。

ロペス・アウスティン先生は、1936年3月12日にメキシコ合衆国チワワ州シウダー・ファレスに生まれた。当初は法学を学んだものの、歴史研究への情熱を捨てきれず、法学を修めた後にあらためて歴史学を学ばれた。学士論文は『メヒコ=テノチティトランの国家構造』*La constitución real de México-Tenochtitlan*（UNAM、1961年）として、修士論文は『人間=神—ナワトル世界の宗教と政治』*Hombre-Dios. Religión y política en el mundo náhuatl*（UNAM、1973年）として、博士論文は『人体とイデオロギー—古代ナワ人の諸概念』*Cuerpo humano e ideología. Las concepciones*

de los antiguos nahuas（UNAM、1980年）として公刊された。

その後も『フクロネズミの神話—メソアメリカ神話学の道』*Los mitos del tlacuache. Caminos de la mitología mesoamericana*（UNAM、1990年）、『タモアンチャンとトラロカン』*Tamoanchan y Tlalocan*（FCE、1994年）、『メソアメリカ宗教伝統小史』*Breve historia de la tradición religiosa mesoamericana*（FCE、1999年）などいくつもの単著を出版された。さらに、ご子息で考古学者のレオナルド・ロペス・ルハンとの共著として、『先住民の過去』*El pasado indígena*（FCE、1996年）、『スウアーの神話と現実—羽毛の蛇と古典期から後古典期へのメソアメリカの変容』*Mito y realidad de Zuyúa. Serpiente Emplumada y las transformaciones mesoamericanas del Clásico al Posclásico*（FCE、1999年）、『聖なる山／テンプロ・マヨール—メソアメリカの宗教伝統における山とピラミッド』*Monte Sagrado-Templo Mayor: el cerro y la pirámide en la tradición religiosa mesoamericana*（UNAM、2009年）、アンデス研究の第一人者であるルイス・ミジョネスとの共著の『北の神々、南の神々—メソアメリカとアンデスにおける宗教と宇宙観』*Dioses del Norte, dioses del Sur. Religiones y cosmovisión en Mesoamérica y los Andes*（メキシコ版 Era／ペルー版 IEP、2008年）や『神話とその時間—メソアメリカとアンデスの信仰と語り』*Los mitos y sus tiempos. Creencias y narraciones de Mesoamérica y los Andes*（メキシコ版 Era／ペルー版 Ceques、2015年）など数多くの共著や編著書も公刊されている。

本邦では、篠原愛人・北條ゆかりの翻訳による『月のうさぎ—メソアメリカの神話学』（文化科学高等研究院出版局、1993年）、さらには、『Iichiko』誌上で翻訳された複数の論文が『カルプリーメソアメリカの神話学』（篠原愛人・林みどり・曾根尚子・柳沼孝一郎訳、文化科学高等研究院出版局、2013年）という単行本として

出版されたほか、岩崎賢会員と筆者が「メソアメリカの宇宙観」(『イベロアメリカ研究』第23巻1-2号、2001~2002年)を共訳している。

メキシコ国外の大学や研究所での活動歴も多数で、その業績一覧は膨大なものである。2015年までのものについては、『アルフレド・ロペス・アウスティン—生と業績』*Alfredo López Austin. Vida y obra* (Eduardo Matos Moctezuma, Ángela Ochoa 編、UNAM、2017年)にまとめられており、出版物だけでも30ページ以上、講演、教育活動、指導歴、受賞歴なども含めるとその一覧は80ページを超える。さらに、これ以後の著作等については、メキシコ国立自治大学・歴史学研究所が発行する『ナワトル文化研究』*Estudios de Cultura Náhuatl*誌上にレオナルド・ロペス・ルハンがまとめる予定とのことである。

ロペス・アウスティン先生は、メキシコ国立自治大学・歴史学研究所の研究員を1966年から務められた。そして、同大学の人類学研究所が創設された後、1976年から亡くなるまでは、同研究所の専任研究員・名誉研究員であった。研究所に所属しつつ、長年に亘って同大学の哲文学部でも教鞭をとられた。筆者は、学部生を対象に開講されていた「メソアメリカ」という科目を1990年代後半に受講したが、毎週金曜日の朝8時開始という授業にもかかわらず、その人気は高く、教室は受講生で溢れて着席する椅子が足りないこともあった様子が思い出される。また、晩年も、大学院生を対象とした講義を人類学研究所の講堂で続けられた。15年ほど前に筆者も博士論文にかかわる内容についてその場で発表させていただいたことがあるのだが、何よりも参加者が闊達に意見や質問を述べ、対話を行うことができ、必要に応じて先生の的確な指摘や応答があるという、学問の最先端の場というべき雰囲気満ちていたことが何よりも印象に残っている。

筆者がアルフレド——ここからは親愛の意をもってこのように呼ばせていただく——に最初に会ったのは、1993年、来日時の国立民族学博物館での講演を拝聴した時だった。まだ学部生だった筆者には、正直なところ、その研究発表の内容は難しすぎてさっぱり理解できない高度なものだった(北條ゆかり先生から頂いた要旨

がなければ、何の話かすら理解できなかったに違いない)。けれども、その数年後、メキシコ外務省奨学生としてメキシコ留学を果たした際、当時の大阪外国語大学(現大阪大学外国語学部)の指導教官であった染田秀藤先生、アルフレドの本の訳者で同大学でもご教授を賜っていた篠原愛人先生を通じて、アルフレドに現地での受け入れ教官を引き受けていただくことができた。

1995年、メキシコに着いてほんの数週後の週末、筆者はその当時まだご存命だったアルフレドの母上が療養生活を送られていたモレロス州テポストランの別宅にお連れいただいた(アルフレドが運転する道中の車の中で奥様のマルタ・ロサリオから差し出されたヒカマを初めて食べたのもいい思い出である)。テポストラン到着後は、当時、ゴルフ場建設を巡る反対運動が激化していたことから地元住民による道路封鎖に遭遇したり、著名な風刺画家リウスがこの反対運動に賛同して描いた壁画を見たりした。さらにその夜には生まれて初めて生きたサソリを見るなど個人的には大騒ぎだった。ともあれ、この時からアルフレドには、何から何まで面倒を見ていただくことになった。

この留学当時、筆者は日本の修士課程に在籍していたのだが、メキシコ国立自治大学留学中に受講すべき科目や指導していただく環境(その中には、クロニカ研究の恩師であるホセ・ルベン・ロメロ・ガルバン先生と故ロサ・カメーロ先生、古典ナワトル語の恩師である故ビクトル・M・カスティージョ・ファレーラス先生との出会いが含まれる)を、アルフレドはすべてアレンジしてくださった。公私に亘ってお世話になり、マルタとアルフレドは、筆者にとってメキシコにおける「両親」とも言える存在となった。

やがて筆者が結婚し、さらに今世紀に入ってから交流は続いた。ある時は、夫婦でテポストランのお宅に泊めていただいたこともあった。また、筆者の娘が生まれた後は、「孫」の写真を送るよう繰り返し催促されたこともよき思い出である。毎年欠かすことなく、娘の誕生日にはメッセージを頂戴し、御礼に写真を送り返すという恒例行事も長年続いた。アルフレドに娘を一目会わせることができなかったのは、本当に心残りである(亡くなった後、彼の自宅に残さ

れた写真アルバムの中に筆者の娘の成長の記録のページがあったことを知り、その無念はなお強まった)。



写真 2 2004 年、テポストランの修道院にて

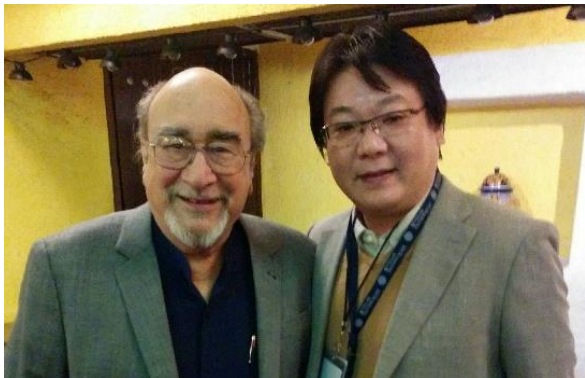


写真 3 2020 年、テオティワカンでの研究集会にて

2020 年 2 月、鶴見英成会員・杉山三郎会員らが参画する新学術領域科研「出ユーラシアの統合的人類史学」でメキシコを訪れた時が、アルフレドと顔を合わせる最後の機会となった。テオティワカン遺跡に隣接するホテルで科研の研究集会が行われ、研究会の前後や懇親会の場で久しぶりに落ち着いているんな話をする事ができた。その翌日の早朝には、一緒にテオティワカン遺跡の上空を気球で飛ぶことができた(本稿の冒頭の写真はこの時に撮影したものである)。

さらに数日後、筆者はメキシコ市のテンプロ・マヨール博物館で開催されたフォーラム(Foro de Arqueología Cognitiva: Monumentos, Arte y Cuerpo Humano, afuera de Eurasia)において、重要な役割を拝命した。アルフレドの報告を代読し、質疑応答に答えるという

ものだった。落ち着いて考えれば、アルフレドの代わりに発表して、聴衆の質問に答えるというのは、何とも大それた役回りだったが、きっとアルフレドが乗り移ってくれたのだと思う(メソアメリカにおいては、一人の人間の本質は、物理的に別の場所にも、同時にその場所にもいることが可能なから)。そのおかげで、聴衆からの質問にも順調に答えることができ、無事に発表を終えることができた。

メキシコ時間 2021 年 10 月 15 日の昼前、アルフレドの息子であるレオナルドから逝去の報告が届いた。日本では深夜だったことから、筆者はその数時間後、日本時間の早朝にアルフレドの訃報を知った。80 歳代のご高齢で、遅かれ早かれそうした瞬間がいつか来るであろうことは何年か前からうすうす脳裏に浮かぶことはあった。けれども、実際にそうってみると、心の空白はあまりに大きかった。

新型コロナウイルス感染症の影響もあり、ようやく今年の 3 月になってから、メキシコ市内のご自宅を訪問することができた。奥様のマルタと涙の再会を果たし、アルフレドの遺骨とも対面することができた。その際、アルフレドの署名の入っていない著書を贈られた。自ら購入したご著書を別にすれば、彼の署名のない本を手にしたのは初めてであった。マルタとの涙の対面の場であったこともあり、署名のないアルフレドの著書を見ると、一層悲しみが込み上げてきた。



写真 4 筆者の手元にある著書の一部

生前、アルフレドは弟子を育てているのではなく仲間を増やしているのだと常々述べておられた。だから、次のように述べると、ご本人がきっと嫌がるのは目に見えている。しかし、筆者は、彼が多くの子を残したと言っていると思っている。育てていただいた私たちが、アル

フレドの圧倒的な仕事量や輝かしい業績に迫ることなど容易にできないことは、十分に自覚している。けれども、彼が切り開いてくれた深淵なるメキシコ先住民の神話や宗教世界、ひいては彼らの生き様そのものを探求する旅は、不肖ながら「弟子」の一人として、その続きの一端を受け継いでいきたい。

最後にもう一つ、アルフレドから託された使命があると個人的には感じている。筆者の手元には、アルフレドの署名と直筆メッセージの入った著書が多数ある。その中には、個人的な再会を喜んだり、筆者を激励する内容のものもある。筆者の家族への愛情を言葉にしてくださったものもある。そして、そのうちの1冊に、「先住民の古くからの伝統の、日本における大使となることを期待する」と記されたものがある。

彼が切り開いた地平をさらに広げ深めていくだけでなく、この言葉の通り、日本においてメキシコ先住民やメソアメリカについての関心の裾野を広げていくという面でも、そのご期待に応えていきたいと思いを新たにする次第である。

かつてアルフレドは、死を迎えればトラロカンやミクトランに行くわけでもなく、ただアルフレド・ロペス・アウスティンは消えていなくなってしまっただけだ、といった趣旨の発言をされている。それでもなお、私自身は、彼がどこかで私たちのことをずっと見ているのではないかという気持ちを捨てられない。どうか、いつまでも私たちを遠くから、いつもの優しく柔和な顔つきで、しかし研究の話をする時には必ず見せるあの鋭い眼光をもって、見守り続けていただきたい。

● 『*Prehistoric Settlement Patterns in the Upper Huallaga Basin, Peru*』

(Yuichi Matsumoto, Yale University Publications in Anthropology, 2020 年 8 月, 35 米ドル)

松本 雄一 (国立民族学博物館)

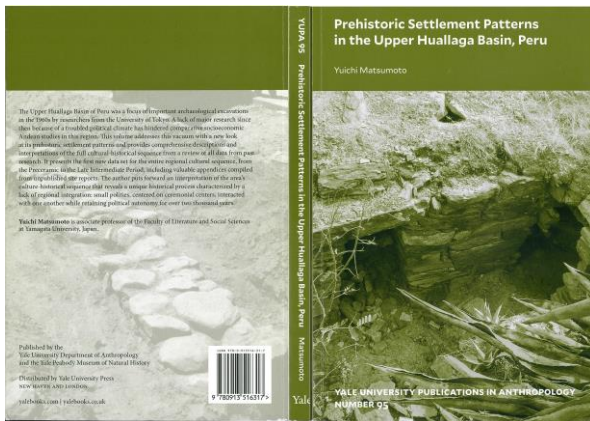


写真 1 表紙と裏表紙

本書はワヤガ川上流域におけるセトルメント・パターンの変遷を論じた英文のモノグラフである。本書の刊行をめぐる紆余曲折に関しては後述するとして、まずはアンデス考古学における同地域の重要性に関して述べておきたい。

ワヤガ川上流域はアンデス北部高地南部、高地と東斜面の熱帯地域の境界に位置しており、アンデス考古学の歴史の中で特別な意味を有する場所である。20 世紀前半に、アンデス文明の起源を外部に求める伝播論を批判して、チャビン文化をその母胎と考えた「ペルー考古学の父」フリオ・C・テーヨは、その起源を探る鍵がこの地のコトシュ遺跡にあると考えた。その後、このテーヨの視点を共有した東京大学アンデス地帯学術調査団 (団長 泉靖一 東京大学教授) は、1960 年～1966 年に行われたコトシュ遺跡の発掘調査を通じて、先土器時代の神殿という当時の学問的な常識を塗り替えるような大発見を成し遂げ、大規模な発掘調査に基づいた前例のないほどの緻密な遺跡編年を確立したのである。

コトシュ発掘の成果が凝縮された二冊の報告書は現在でも基礎文献として引用され続けており、その高い学術的価値は今日なお失われていない (Izumi and Sono 1963; Izumi and

Terada 1972)。しかしその後のアンデス考古学の展開をみると、ワヤガ川上流域は 1970 年代以降にアンデス全域で盛んになったセトルメント・パターン研究から取り残され、ある種の空白地帯となってしまっていた。その背景には、同地域が 1970 年代以降にペルーを席卷したテロリズムの影響を特に強く受けた地域での一つであったというやむを得ない事情があった。

このような問題意識から、2001 年と 2002 年にワヤガ川上流域において井口欣也先生 (埼玉大学) と大貫良夫先生 (リトルワールド博物館) によって考古学調査が行われ、筆者も 2001 年の遺跡分布調査及び 2002 年の発掘調査に参加し、遺物分析の機会をいただいた。本書の核となっているのは、2001 年の調査データである。

2002 年の調査が終了した段階で、井口先生と大貫先生のご厚意で、遺物を分析して論文にすることを勧めていただいていた。それにもかかわらず、すぐに出版準備に取りかかれなかったのは、当時アメリカ合衆国の大学院に入り直すことを決めていたからである。2004 年にイエール大学の博士課程に入ってリチャード・バーガー先生のもとで学び始めてからは、授業についていくのが精いっぱいであり、このデータのことは完全に頭から消えていたのだ。その後 2006 年の終盤にひとつ転機となる出来事があった。当時博士候補生の試験になんとか合格した私は、相変わらず英語力のなさに苦しんでいたが、この点は指導教官も相当に危惧していたのだろう。私にその時点で使えるデータで投稿論文を書いてトレーニングするように勧めてくれたのである。そこで指導教官であるバーガー先生と同期のジェイソン・ネスビット氏 (現デュレーン大学准教授) の全面的なサポートのもと四苦八苦しながら 2007 年にまとめた草稿が本書の原型である。ところが、何も考えずに書き始めた草稿は記述的なデータを多く含み、雑誌論文とし

ては長すぎるものであった。投稿先にと考えていた雑誌の当時の編集長であり高名なアンデス考古学者であるカタリナ・シュライバー先生(カリフォルニア大学サンタバーバラ校)が、バーガー先生に「ここまでデータがそろっているならもういっそのこと本にしてしまえばいい」という意味のことを言ったらしく、いつの間にか本を執筆する話がまとまってしまった。しかしここでまた本書の執筆は長い中断に入る。私が別の地域で博士論文のための調査を始めることにしていたからだ。結果として本書の執筆は2010年まで、博士論文執筆の合間を縫って断続的に進むことになる。2012年に査読を経て採択が決定したが、その時点で出版の順番にかなりの待ちが生じていたらしく、ようやく編集作業が始まったのは2018年になってのことであった。

このような紆余曲折を経て出版された本書であるが、最終的にはこの地域を対象とした考古学で初めて、先スペイン期の通史を描き出すことができたことに一つの意義があると感じている。実際のところ2001年の調査は、形成期(紀元前3000年-紀元前後)を対象としたものであったため、あらかじめ形成期の遺跡の存在が想定される河岸沿いの標高の低い場所に調査範囲を限定したものであった。以前から形成期より後の時代に属する遺跡が標高の高い、アクセスの困難な場所に位置することは知られていたため、あくまで形成期におけるセトルメント・パターンの変遷をたどるための調査という位置づけだったのである。しかし、遺跡の表採遺物を精査した時に、形成期以降の遺跡もかなりの数が標高の低い場所に存在していることが明らかとなった。このデータを生かすために文献を渉猟したところ、踏査でカバーできなかった標高の高い場所で1980年代にスー・グロスボール氏が形成期以降の遺跡を対象とした重要な調査を行っており、その詳細なデータを提示した博士論文を執筆していたことが分かったのである(Grosboll 1988)。そして、彼女のデータをセトルメント・パターンに組み込むことで、仮説的ではあるが形成期以降のセトルメント・パターンを論じることが可能となったのだ。

本書において特筆すべきもう一つの点は、5つの補遺(Appendix A-E)において提示された

これまでに出版されていない同地域に関する論考である。大貫良夫先生によって行われた1960年代のワイラヒルカ遺跡及びシヤコト遺跡の調査に加え、2002年に発掘されたピキミナ遺跡の発掘調査に関する論考が含まれており、現在では破壊が進んでしまっている遺跡の貴重なデータが提示されている。また、本書の最後を飾る補遺Eとして、大貫先生に1960年代の調査を総括する文章を寄稿いただいた。これによって、本書とコトシュ遺跡の成果が接続されたように感じ、著者として非常に光栄に思っている。このように本書においては、補遺は本文と同等の重要性を有しているのだ。

本書を通じて筆者が試みたことは、新たに得られたセトルメント・パターンのデータを軸として、断片的であったワヤガ川上流域の考古学データを統合し、他地域との通時的比較を可能とすることであった。しかし、あくまでもその位置づけは、仮説的な展望を提示し、新たな調査の出発点を作り上げることであると考えている。この点に関しては、最近Antiquity誌に掲載されたアレキシス・マンサ氏の本書に対するフェアな書評に筆者も完全に同意する(Mantha 2022)。実際に本書で提示した社会変化の通時的シナリオは、2010年以降同地域および近隣地域において調査を開始した鶴見英成氏(放送大学)、金崎由布子氏(東京大学)、ニコラス・ブラウン氏(イェール大学大学院)ら気鋭の研究者の新たな調査によって修正を迫られ、精緻化され、乗り越えられつつあるのだ。本書が、まだまだ基礎的な調査が不足しているこの地域の考古学を活発化させることに寄与できるならば、著者としてこれ以上の喜びはないと考えている。

引用文献

Grosboll, Sue.

1988 An Archaeological Approach to Demography of Prehispanic Andean Communities. PhD Dissertation, University of Wisconsin, Department of Anthropology.

Izumi, Seiichi and Toshihiko Sono.

1963 *Andes 2: Excavations at Kotosh, Peru, 1960*. Tokyo: Kadokawa Publishing Co.

Izumi, Seiichi and Kazuo Terada.

1972 *Andes4: Excavations at Kotosh, Peru, 1963 and 1966*. Tokyo: University of Tokyo Press.

Mantha, Alexis.

2022 *Review*. *Antiquity* 96: 776-778.

● 『*Indigenous Knowledge as a Resource: Transmission, Reception, and Interaction of Knowledge between the Americas and Europe, 1492-1800*』

(Laura Dierksmeier, Fabian Fechner, Kazuhisa Takeda, (eds.), Tübingen University Press, 2021 年 8 月, 59,50 ユーロ)

井上 幸孝 (専修大学)

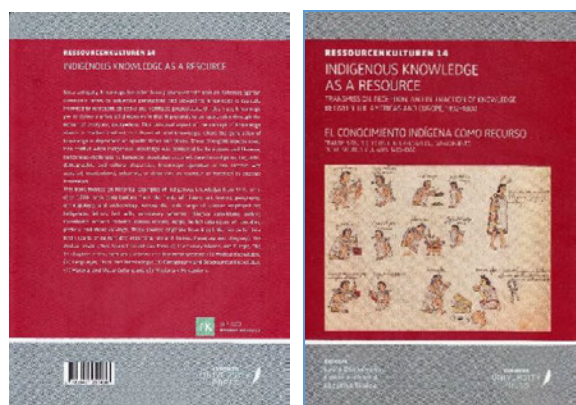


写真 1 表紙と裏表紙

今から 4 年ほど前のある日、羽田—フランクフルト便でドイツに降り立った筆者は、シュトゥットガルトにいた。というのも、この街にあるヴュルテンベルク州立博物館には、フリードリヒ 1 世 (ヴュルテンベルク公、1593-1608 年) のコレクションに由来する有名なチマリ——アステカの円盾——2 帖があり、これを見ないわけにはいかないと考えたからだ。だが、この旅の本来の目的は博物館を訪れることではなかった。しばしチマリに見入った後、筆者は足早にその先のチュービンゲンへと向かった。チュービンゲン大学で催される国際集会“Indigenous Knowledge as a Resource: Transmission, Reception, and Interaction of Knowledge between the Americas and Europe, 1492-1800”に出席するためであった。

この国際集会は、2018 年 9 月 11~12 日にチュービンゲン大学で開催された。コーディネーターは、ラウラ・ダークスマイヤー (チュービンゲン大学)、ファビアン・フェヒナー (ハーゲ

ン通信大学)、武田和久 (明治大学) の 3 氏であった。3 氏はそれぞれの研究活動を進める中でアルゼンチンやドイツで知己を得て、互いに交流を深めており、この研究集会を企画するに至ったという。

チュービンゲン大学の施設となっているホーエンチュービンゲン城で行われたこの研究集会では、発表および議論は時に英語、時にスペイン語でなされ、2 日間にわたって闊達で実りあるディスカッションが展開された。

開催から 3 年近くが過ぎ、この研究集会の成果は論文集として公刊された。本書の表題は、英語に加えてスペイン語 (*El conocimiento indígena como recurso: Transmisión, recepción e interacción del conocimiento entre América y Europa, 1492-1800*) が併記されており、収録された論文も、英語のものと同様にスペイン語のものがある。執筆者はドイツ、スペイン、メキシコ、ペルー、アルゼンチン、アメリカ合衆国、日本の 14 名の研究者で、その内容は、以下の通りである。

Introduction

- ◆ *Laura Dierksmeier and Fabian Fechner*, Indigenous Knowledge as a Resource: Transmission, Reception, and Interaction of Knowledge between the Americas and Europe, 1492-1800. Truthmakers and Contexts of Indigenous Knowledge Transmission
- ◆ *Laura Dierksmeier y Fabian Fechner*, El conocimiento indígena como recurso: Transmisión, recepción e interacción del conocimiento entre América y Europa, 1492-1800. Los creadores de la verdad y contextos de transmisión de conocimiento indígena

I. Medical Knowledge

- ◆ *Harald Thun*, El saber médico de los guaraníes y la medicina de los jesuitas. Transmisiones y transformaciones
- ◆ *Miriam Lay Brander*, On Indio Priests, Muslim Physicians and Konkani Servants. The Reception of Indigenous Medical Knowledge in Early Modern Seville and Goa

II. Language, Texts, and Terminology

- ◆ *Rosa H. Yáñez Rosales*, Traces of Spoken Nahuatl in Colonial Texts from the Obispado and Audiencia de Guadalajara
- ◆ *Yukitaka Inoue Okubo*, The Notion of Authorship in Selected Indigenous Chronicles of New Spain
- ◆ *Richard Herzog*, Conferring a Universal Scope to Nahua Political Concepts. An Aim in the Works of Domingo Chimalpahin (Early 17th Century)

III. Cartography and Geographical Knowledge

- ◆ *Kazuhisa Takeda*, Indigenous Knowledge of Land Use and Storage Practices of Historical Documents in the Jesuit-Guaraní Missions of Colonial South America. A Comparative Analysis of Maps and Census Records
- ◆ *María Laura Salinas*, Entre guaraníes, caciques y frailes. El cabildo de indios del pueblo de Itatí, Río de la Plata, a fines del siglo XVIII y principios del XIX
- ◆ *Irina Saladin*, Authenticating Local Information. Indigenous Informants at the Amazon and the Spanish/Portuguese Boundary Commission in 1782

IV. Material and Visual Culture

- ◆ *Anna Boroffka*, Painting a Universal History of the Aztec World. Translation and Transformation of Indigenous Knowledge in the Illuminations of the 'Florentine Codex'
- ◆ *Christine D. Beaulé*, Qeros and the Conservation of Indigeneity in the Spanish Colonial Andes
- ◆ *José Farrujia de la Rosa*, Indigenous Knowledge in the Canary Islands? A Case Study at the Margins of Europe and Africa

V. Missionary Perceptions

- ◆ *Corinna Gramatke*, Materialidad y traspasso de saberes. Fuentes y empirismo en el "Paraguay natural ilustrado" de José Sánchez Labrador (1717–1798)
- ◆ *Álvaro Ezcurra Rivero*, Concesiones, transformaciones y rechazos del conocimiento indígena en los sermones de Fernando de Avendaño (Perú, siglo XVII)
- ◆ *Susanne Spieker*, Knowledge about Children, Education, and Upbringing in Bernardino de Sahagún's Florentine Codex

書名に示されているように、本書では「先住民の知識」の伝播・受容・相互作用が主題となっている。1492年以降のヨーロッパ人による南北アメリカの征服・植民地化は、一方的な搾取や支配を生み出したのみならず、現地に根差した知識・情報の地球規模の流通も生じさせた。第1部は医療に関わる知識、第2部は言語やテキスト、第3部は地図や地理的な知識、第4部は物質文化、第5部は布教に関わる認識をテーマとしている。各々の項目には2編ないしは3編の論考が収められており、歴史学のほか人類学・考古学・言語学など多様な分野の研究者が学際的な視点でそれぞれに論じている。そして、これら第1部～第5部に振り分けられた5つの具体的テーマは、書名が示す中核テーマである先住民の知識の流通への問題関心という縦糸で貫かれている。

かつては、西ヨーロッパ人が南北アメリカを支配し、一方的に影響を与えたかのように見なされることが多かった。しかし、「邂逅」の時点で長い歴史を積み重ねていたアメリカ先住民の知は全面的に排除されたり、消えてなくなってしまったりしたわけではなかった。本書の各論考が示すように、様々な形での伝播や受容、さらには相互作用を生み出すこととなった。このような議論ができるためには、先コロンブス期や植民地期の先住民社会についての具体的研究の進展が欠かせない。実際、30年前や50年前と比べれば、南北アメリカ各地の特定時期の個別の社会に関する詳細な研究は飛躍的に進展してきた。本書に集められた各論考は、21世紀最初の20年が経過しようという現時点での研究の到達点を端的に示すものだと言える。そして、上述のような、西洋中心主義的ではない観点から世界規模での「グローバル・ヒストリー」の展開を考えていくうえで、本書がカバーしきれなかった分野や、本書で示された各事例のさらなる深化が今後も研究成果として世に問われていくことが重要となるだろう。

なお、本書は紙媒体で販売されているだけでなく、オープンアクセスで以下のURLからPDF形式でのダウンロードが可能である。本学会の会員諸氏にもぜひアクセスいただき、実際に本書をご覧いただきたい。<https://publikationen.uni-tuebingen.de/xmlui/handle/10900/117746>

●『古代アンデスにおけるワリ国家の形成：小集落からみた初期国家の出現過程』

(土井正樹著、臨川書店、2022年2月刊、18,000円＋税)

土井 正樹 (関西外国語大学)

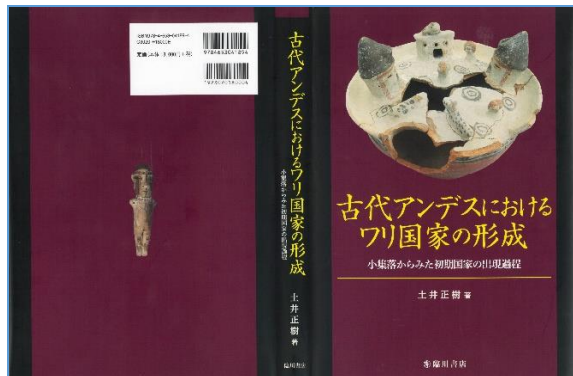


写真1 表紙と裏表紙

ワリは7世紀頃に出現したアンデス地域最初の帝国といわれている。その核となる国家はどのように出現したのであろうか。この問題の解明に、当時の一般の人々の生活に関わる資料から挑んだのが本書である。

本書のもととなったのは、2012年に総合研究大学院大学に提出した博士学位論文『小集落から見た初期国家の形成過程—先スペイン期中央アンデスのワリ国家を事例として—』である。博士論文の書籍化にあたっては、大幅な加筆・修正を行ったが、その際とくに心がけたこととして、次の2点がある。

① 情報のアップデート

博士論文の提出から書籍化までに約10年が経過していた。この間のワリ研究の進展にはめざましいものがあり、できるかぎりそれら最新の研究成果を反映するよう努めた。

② 丁寧な説明

書籍化を通じて、できればアンデス考古学に関心をもつ読者だけでなく、広く古代国家の形成に関心のある研究者や学生にも手にとってもらいたいと考えた。博士論文はアンデス考古学の専門家を中心に想定していたが、書籍化するのであれば他地域の古代国家の形成に関心を持つ研究者にも読みやすい内容にしたいと考えた。学術書であるため概説書のようなわかりやすさにはなっていないが、ワリについて予備知識のない読者であっても理解しやすいようワリについての説明を増やし、写真と図版も大

幅に追加した。

本書の構成は以下のとおりである。

- 第1章 初期国家形成論と小集落
- 第2章 ワリ研究史
- 第3章 アヤクーチョ谷の踏査
- 第4章 トリゴパンパ村周辺遺跡での発掘調査
- 第5章 編年と遺跡の利用時期
- 第6章 土器の属性分析
- 第7章 経済活動
- 第8章 小集落の祭祀
- 第9章 墓からみた社会
- 第10章 国家形成下の小集落

第1章では、本研究がアンデス地域の社会展開の理解に限定されるものではなく、(古代)国家形成論一般への貢献を目指すものであることを明確に示すことを企図した。そのためここでは、考古学界全体においてこれまで国家形成についてどのような議論が行われてきたのかを、主に理論面から検討している。その結果浮かび上がってきた問題点が、本書を貫くテーマである「一般の人々の生活から国家形成をとらえる」という視点の欠如であった。権力とは社会的リーダーが独占するものではなく、インタラクションを行う者の間で相互に行使されるものであるという近年の権力観に立つのであれば、古代国家の形成の問題においても、そのような視点に立った研究が必要不可欠である。なお、新進主義的先入観から逃れるために国家という用語の使用を避ける研究者もいるが、本書では、地域や時代を超えた比較を行うためには国家という用語の使用は必要であるという考えに基づき、国家という用語を使用している。

第2章では、事例としてのワリについて、その概要説明と先行研究における問題点を明らかにした。はじめにワリに関する一般的イメージについて説明したあと、これまでのワリ研究史を振り返り、第1章で指摘した「一般の人々の生活から国家形成をとらえる」という視点欠如

の問題が、ワリ研究にも当てはまることを確認した。さらにワリ研究では、「その成立過程に対する関心が希薄である」、「周辺部に対し中心地における調査が不足している」、という問題も存在することを指摘した。

第3章では、前章までに述べた問題解決のための調査対象遺跡を選定することを目的とし、ワリの中心地であるペルー中央高地のアヤクチョ谷で実施した踏査の方法と結果について述べている。踏査したのは36遺跡であった。発掘調査地の選定にあたっては、「ワリのセンターとしての特徴を有さない」などの調査対象として必要な5つの条件に基づき、それらを満たしていた3遺跡を選んだ。3つの遺跡を調査することにしたのは、1つの遺跡だけで問題となるすべての時期に関する資料を入手することは困難であるが、3遺跡の資料を総合することにより、問題としている全時期をカバーすることができるかと判断したからである。

第4章では、選定した3遺跡における発掘調査の方法と、その結果明らかになった遺構の重なり合いの様子や各遺構の特徴について述べた。建築と層位に基づく時期区分を行い、同時代の遺跡間での遺構の特徴の違いを明らかにした。とくに、墓や祭祀施設について新たな特徴を明らかにすることができた。

第5章では、発掘調査を実施した3つの遺跡の編年上の位置づけを明らかにするため、出土した土器の編年的検討を行った。その結果、踏査時に予想したように、3遺跡の利用時期を総合することにより、ワリの繁栄期とその前後に関する時期の全体をカバーできることが確認できた。さらに、新たな特徴を有する土器が存在したため、それらをグループ（暫定的タイプ）として整理した。

第6章では、出土した土器の製作技法や利用法に関する分析を行った。その結果、時代が新しくなるにつれ土器作りが簡素化していく傾向が認められること、ワリ繁栄期には、丁寧に製作された装飾土器と粗雑な無文土器という対照性が高まることを明らかにした。また器形の分析では、ワリ繁栄期の前の時期からワリ繁栄期にかけて、日用土器と祭祀用土器の分化が進んだ可能性を明らかにした。

第7章では、農耕、織物、土器製作に関する

道具と長距離交易品と考えられる遺物の出土量の分析を通じて、小規模な集落での経済活動に対するワリ国家出現の影響を検討した。その結果、小集落における農耕の強化とウミギクガイの入手がワリの出現と関わっていると推察されたものの、その影響は限定的であることが判明した。

第8章では、小集落における祭祀に関する考察を行った。調査では土偶や小さな像が複数出土しており、それらは小集落の人びとが世帯レベルの儀礼がワリの出現前から出現後にかけて変わらず継続していた可能性を示していた。また、ワリ出現前の時期のD字形建築の機能に関する検討も行い、ワリの祭祀建築の起源が小集落にある可能性を明らかにした。

第9章では墓に関する考察を行った。従来のワリ研究では墓の規模や構造が社会階層と関連づけられて解釈されることが多かったが、ワリの出現前の時期の、あまり社会の階層化が進んでいない状況下での墓の構造にも大きな多様性が認められることから、墓の構造と社階層との関連づけは慎重になされるべきであるという考えを示した。

第10章では、これまでの議論の総括として、国家形成における一般の人々の役割について論じた。一般の人々のローカルな実践がワリの形成に少なからず影響を及ぼしていたという結論は、検討した資料の不十分さから暫定的なものにならざるを得なかった。しかし、一般の人々に注目することによってこれまでの国家形成論とは異なる議論が可能であることは示せたように思う。本書がこれまでの古代国家の形成論に一石を投じることになれば幸いである。

以上が本書の内容であるが、最後に調査地の遺跡の現状についても触れておきたい。踏査時に、複数の遺跡で破壊が進んでいる様子を目の当たりにした。とくに本書が対象としたような規模の小さな遺跡は、住民による農耕、家や水路の建設による破壊を受けていた。

本研究は、小さな遺跡を調査し、その資料を後世に残すという取り組みにもなっている。

●『アンデス文明ハンドブック』

(関雄二 (監修)、山本睦 (編)、松本雄一 (編)、臨川書店、2022年3月、3,400円+税)

山本睦 (山形大学)、松本雄一 (国立民族学博物館)

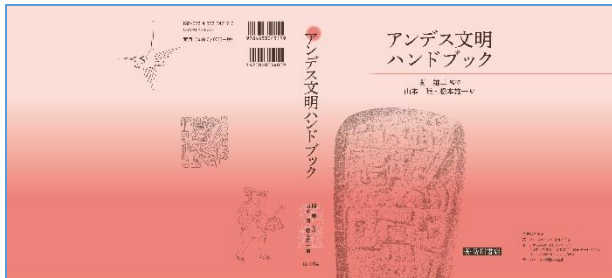


写真1 表紙と裏表紙

本書は、アンデス文明に関する初学者向けの導入書、および大学学部生用の教科書を意図して編纂されたものである。また、本書は、メディアなどから情報をえるほか、関連する一般書を読むなどしてアンデス文明に興味を抱いた人たちに、そこから一歩進んだ学問的な面白さに触れてもらうための書籍として位置づけられる。

アンデス文明に関して、ナスカの地上絵やマチュピチュ遺跡といった著名な文化遺産は、日本においても広く知られた存在となっている。しかしその一方で、日本人によるアンデス文明の調査・研究が、半世紀以上の歴史を持ち、国際学会の最前線にたち続けていることは、あまり知られていない。そこで本書では、アンデス各地で調査をおこなう気鋭の日本人研究者らに、各自の専門とする地域および時期について、自身の調査成果や最新の知見、国際的な研究動向を関連づけながら、できるだけ平易に論じてもらうことを意図した。その結果、執筆者の方々に多大な負担を強いることとなってしまったことも確かである。編者の側からは「最新の研究動向と自身の成果を盛り込んだ文章を、厳しい字数制限のなかで大学初年度生にもわかるかたちで書いてください」というあまりにも無茶なお願いをした。また、それが前提としてあったために、提出いただいた各原稿に対しても、編者からの注文が非常に多くなってしまった。しかしそのかいもあって、それぞれの章およびコラムは高い学問的レベルと読みやすさを両立させるものとなったのではないかと感じている。

本書で提示したかったのは、つきつめれば

「古代文明は決して単純なものではなく、それゆえに面白い」というシンプルなことである。初学者向けの書籍においては、どうしても「進化の到達点としての古代文明」というイメージを押しよくできない印象がある。しかし現在までの研究の蓄積によって、アンデス文明においては、単純な右肩上がりの発展図式が通用せず、そこで展開した社会は、われわれがイメージする「国家」などのカテゴリーではとらえることができない個性豊かなものであることがわかっている。

これをうけて本書では、このような社会を従来のカテゴリーに押しこめることなく、そのユニークさをありのままに描写することを目指した。まずは、それぞれの社会の個別の歴史的動態に焦点をあてたうえで、それらを全体の流れに位置づけることを意図したのである。つまり、本書においてアンデス文明は、社会のある段階をさすものではなく、先スペイン期に展開した諸社会の歴史的過程の総体として扱われているのだ。

このような特色を持つ本書には、壮大な神殿の出現からスペイン人によるインカ帝国の征服、文化遺産をめぐる現在進行形の問題にいたるまで、総勢20名の専門家によるアンデス考古学の最前線が凝縮されている。アンデス文明の主要な時代とテーマを網羅し、研究の醍醐味を解説した本書によって、アンデス文明のファンが少しでもふえると同時に、より多くの人々がアンデス研究を志す一つのきっかけとなることが、すべての執筆者と編者の心からの願いである。アンデス文明研究のすそ野を広げたいという編者の意図に共感し、無茶を可能とさせていただいた執筆者の皆様には心より御礼を申し上げたい。

最後に、本書の出版は、アンデス研究を長年にわたって主導してきた関雄二先生の定年退職を記念して企画されたものでもある点を申し添えたい。関先生は、形成期を中心として国際的な学術研究の最前線に立ち続けると同時に、アンデス文明を全体としてとらえる視座を常に提

示されてきた。また、研究を現地社会とのつながりのなかで誠実に実践するという研究スタンスを一貫してとられてきた。この点は、本書の第Ⅰ部から第Ⅲ部の構成にも明確に反映されている。さらに、先生は、アンデス文明の面白さを専門家以外の人々に伝えることにも尽力されてきた。その研究者としての姿勢を考えた時に、専門家から初学者にいたるまで、ひろく門戸がひらかれた『アンデス文明ハンドブック』を多くの方々とともに上梓するにいたったのである。

はじめに (山本睦、松本雄一)

序章 アンデス文明研究とその背景 (松本雄一、山本睦)

第Ⅰ部 神殿と共に生きた人々 (紀元前 4000 年—紀元前後)

序 形成期という時代、神殿更新論という視座 (山本睦、松本雄一)

第 1 章 巨大建造物はなぜ、どのように生まれたのか 海岸のマウンドと残された謎 (荘司一歩)

第 2 章 神殿を建て続けた人びと (鶴見英成)

第 3 章 社会の核としての神殿 遠隔地との交流はなぜ生じ、何を社会にもたらしたのか (井口欣也)

第 4 章 人を結びつけ、切り離す神殿 (関雄二)

第 5 章 神殿と人、神殿と動物 神殿における動物利用の実態 (鶴澤和宏)

第 6 章 神殿と饗宴 神殿で共に食べるということ (中川渚)

第 7 章 儀礼としてモノをつくる 形成期の神殿における工芸品製作と権力の生成 (荒田恵)

第 8 章 神殿は何を伝えたのか 神殿の装飾に込められたメッセージ (芝田幸一郎)

第 9 章 周縁の神殿ではなにがおきていたか文明の形成を端から眺める (松本雄一、山本睦)

コラム 生物考古学からみたアンデス最古の儀礼的暴力 (長岡朋人)

第Ⅱ部 アンデスにおける国家と帝国 国をつくった社会とつくらなかった社会 (紀元前後—16 世紀)

序 国家、帝国、狭間の社会 (松本雄一、山本睦)

第 10 章 ナスカの地上絵をめぐる景観と土器の儀礼的破壊 (坂井正人)

第 11 章 小さな集落からみたワリ帝国の支配 (土井正樹)

第 12 章 「宗教国家」ティワナク その出現から衰退まで (佐藤吉文)

第 13 章 建国しなかった人々 ペルー北高地のカハマルカ文化 (渡部森哉)

第 14 章 北海岸に花開いた多民族国家 ランバイエケ (松本剛)

第 15 章 モニュメントなき都市 チャンカイ文化 (浅見恵理)

第 16 章 インカとは誰か? (渡部森哉)

コラム アンデス文明における食料資源の獲得戦略 (瀧上舞)

第Ⅲ部 現代社会とアンデス文明

序 考古学は過去だけを対象とするのではない (山本睦、松本雄一)

第 17 章 パブリック考古学の実践 (サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテ)

第 18 章 ナスカの地上絵の学術調査と保護のあり方 (坂井正人)

第 19 章 遺跡保存における考古学者と地域社会の役割 (関雄二)

コラム デジタル技術による古代建築研究の新たな展開 (宮野元太郎)

おわりに (山本睦、松本雄一)

参考文献／執筆者紹介／索

●古代アメリカ学会主催第3回公開シンポジウム：「まなぶ、たのしむ南北アメリカの古代文明—研究成果から学びの場へ—」

2021年12月19日、26日の2日にわたって、公開シンポジウムが開催された。南山大学を本部としたZoomによるオンライン開催であった。開催に当たっては創文印刷工業株式会社(2022年4月1日より株式会社ソブ・ドットコム)にサポートをお願いした。

本シンポジウムは井口欣也会長による提案から始まった。科研費による前回のシンポジウム(2010年10月3日に仙台で開催)から約10年経つことから、再び科研費によってシンポジウムを開催してはどうかという。そのためワーキンググループを組織して、2019年6月22日に名古屋大学に、井関睦美、伊藤伸幸、小林貴徳、芝田幸一郎、渡部森哉の5名が集まり対面で案を練った。その時に出た基本的なアイデアは、「社会(中高生)に直接発信するという構成ではなく、研究成果と社会をつなぐ取組に着目する」ということであった。また「研究成果と社会の接合という方針が分かるようにする」構成を考えた。つまり、参加した聴衆向けの単発のシンポジウムではなく、教員やマスコミ関係者など、知識を扱う職業の人々に古代アメリカの知識を持ってもらうことで、そこからさらに情報が広がる効果を期待する構成を考えることとした。また会場を東京と岡山の2カ所で開催する方針とした。

5名で申請書を作成し、提出した結果、2020年度の科研費が採択された。ところが採択結果が届いた2020年4月は、新型コロナウイルスが猛威を振るっている真最中であった。2020年12月に開催予定であったが、延期を余儀なくされた。2021年度開催になったわけであるが、ぎりぎりまで対面形式での開催にこだわったものの、結局オンライン開催となった。ちなみに会場として東京大学伊藤国際学術研究センター、および、岡山コンベンションセンターを予約していた。

開催に当たっては、講演録を作成し、それを学会のウェブサイトに掲載するという方法を選択した。その結果、講演はライブ配信1

回のみで、肖像権等の問題は生じなかった。なお講演録の作成については科研費を使用できなかったので学会の予算から支出した。当日の講演内容については学会ウェブサイトから講演録をダウンロードしてご覧いただきたい。シンポジウムの最後のディスカッションの時間には、事実確認や解釈を問う内容ではなく、古代アメリカに関する知識と社会(研究者以外の人々)を繋ぐ試みについて、その方法、効果、問題点などを議論した。しかしおそらく多くの論点が残されているかと思われる。特に教育現場の人々などから意見をすくい上げる方法が課題であろう。また、この講演録をできるだけ多くの人々に届けることはまだ課題として残されている。

今回のシンポジウムの最大の特徴は、古代アメリカ学会の会員以外から、伊藤遊さん、芝崎みゆきさんの2名にご登壇いただいたことである。マンガに詳しい小林貴徳さんの提案によりお二人に依頼した。おかげで、会員内の議論にとどまらず、知識を社会に還元する意味と方法を多角的に捉えることに繋がったと思われる。

シンポジウム開催に当たっての最大の課題は、情宣の方法であった。研究大会や講演会など研究者対象のイベントの情報については、メーリングリスト等で拡散する方法があるのだが、中高生や教員に情報を届けるための方法がよく分からないままであった。それは今後、同様のシンポジウムを開催する際の課題であろう。また、シンポジウムの目的には2022年度から始まる科目「歴史総合」、2023年度から始まる「世界史探究」を対象として、古代アメリカ関係の知識を用いた授業案を検討することが含まれていた。これについては引き続き検討していきたい。

参加者数は2日間で176名であり、予想よりも少なかったが、古代アメリカ研究の裾野を広げていく試みはこれからも続けていく必要がある。

(渡部森哉)

●第13回東日本部会研究懇談会「若手研究者による研究の紹介2: ベイズ統計解析による14C年代の較正と土器編年の精緻化」

コロナ禍のなかで研究懇談会をより有意義なものとするために、担当者たちはオンライン開催ならではのメリットのある企画を立ち上げるべく、10数回におよぶミーティングを重ねた。その結果、①海外の会員をはじめとして、開催地から離れた場所に居住し通常は懇談会に参加しづらい会員が参加できること、②発表をあらかじめ動画としてアップロードしておくことで、議論に時間を割くことが可能となること、の2点が大きなメリットとして浮かび上がってきた。そして議論を活発化させるためには、会員が広く興味を持つようなテーマが必要であるため、研究の技術的、方法論的を扱うことが良いのではないかという結論に至った。そこで、学位論文を書き上げた気鋭の研究者である金崎由布子氏にお願いし、土器の系統論とベイズ統計を組み合わせた手法を発表していただくこととなった。開催日時は2021年5月29日(土)の13:00~15:00であったが、その一週間前から発表動画をアップロードし、参加者にはあらかじめ動画を視聴していただいていた。ホストは山形大学が務めた。参加者はWebによる総エントリー数が71名、当日参加者が45名であった。

「土器・ベイズ・時間性：紀元前二千年紀のワヌコ盆地の編年をめぐる一考察」と題された金崎氏の発表は、主にアンデス東斜面のワヌコ盆地における紀元前2000年紀の考古学資料を扱ったものであったが、その論点は、①土器編年はどのようにして精緻化可能か、②14C年代のベイズ分析はどのような新たな

見方につながるか、③編年研究は「時間性」の問題とどう結びつくか、という3点に整理されており、高精度編年がそれまでの研究データをめぐる解釈をどのように変えうるかが、具体的な形で示された。金崎氏が年代測定室の大森貴之氏と共に行った、ベイズ分析による年代解析の結果、土器の変化が100年単位で明らかとなり、「山地・熱帯の伝統の融合」として捉えられてきたワヌコ盆地の初期の土器発達のより複雑なプロセスが提示された。さらに、これまで同時期とみなされていた各遺跡の利用の多様性が明らかとなった。例えば、継続的に利用されたと考えられてきたコトシュ遺跡では、ある時期の利用の痕跡が存在せず、その後の時期にも利用の間隙が認められた。コメンテーターは議論を広く開くために、あえてアンデス考古学を専門としない方々に依頼した。塚本憲一郎会員(カリフォルニア大学リバーサイド校)からはベイズ統計の前提となるそれぞれの層位に関して、コンテキストを具体的に明らかにすることの重要性が指摘された。また、会外よりお招きした白石哲也氏(山形大学)からは、扱われた土器を系統論的に論じる際の分析単位をどう設定するかという問題提起がなされた。会外からも、日本考古学をはじめとする、異なる分野の専門家が参加し、活発な議論がなされた。研究懇談会をオンラインで開催する際の一つのモデルケースになったのではないかと考えている。

(運営委員(研究担当) 松本雄一)

●第11回西日本部会研究懇談会「著者と語る図書紹介 その裏側全部見せます！！」 『図説 マヤ文明』×『古代マヤ文明 栄華と衰亡の3000年』

東日本部会に続き、第11回西日本部会も、コロナ禍における取組として、オンライン開催とした。準備時から、東西にこだわらず、研究担当役員と東西懇談会幹事が合同で内容を企画し、開催日当日(2021年10月2日(土)13:00~15:00)も運営協力して実施した。

研究懇談会は、非会員にも公開して、古代アメリカ研究の促進のみならず、その幅広い普及を目的に実施されてきた。この目的を念頭に新たな企画を考案した。それは、博士論文等にかかる専門的研究発表や一般向けの講演会とも違う、古代アメリカ学会おすすめの新書を、著者自身に紹介してもらう「図書紹介」という新企画である。

その初回として、カラー図版と内容の豊かさで人気の「ふくろうの本」シリーズから『図説 マヤ文明』を出版された嘉幡茂会員、それに新書レーベルとして歴史ある中公新書で『古代マヤ文明 栄華と衰亡の3000年』を刊行された鈴木真太郎会員のお二方にお話いただいた。

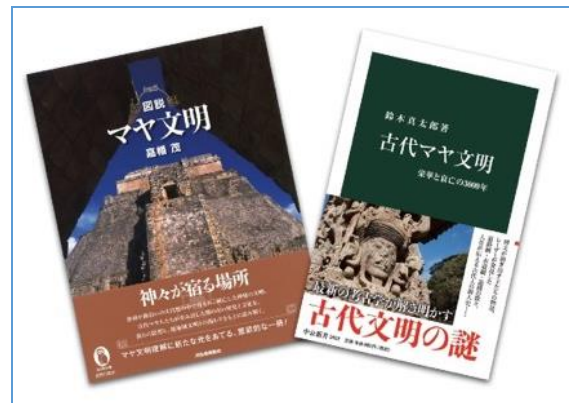
会の前半は、それぞれの発表である(各約30分)。鈴木会員は「世界標準のマヤ考古学を日本語で学ぶ」ための一書となることを意識して、考古人骨研究を中心に執筆したという。嘉幡会員は「古代メソアメリカ文明におけるマヤ文明の役割とは何か、他地域の文明との接触の中で彼らの思想はどのように誕生し変化していったのか」をテーマにその解明に挑んだという。二人からは、専門的になりがちな内容を比較的一般向けを意識しながらわかりやすく解説いただいたと共に、本の執筆に至るまでの研究過程やキャリア形成についても紹介いただいた。

会の後半はクロストーク(約40分)として、以下の話題について、司会から二人に質問しお話しいただく形とした。すなわち①日本語で一般向けの書籍を出す意味や、そこに至る経緯は?②現地での経験から見た日本におけるメソアメリカの研究/教育は?③現地

で考古学者になるには?④調査での苦労話・体験談、の4つである。二人とも、具体的且つある種「赤裸々」にお話ししてくださり、内容は非常に豊かなものになった。それをあえて概括するならば、①は二人とも日本でのマヤ文明研究の普及(当該分野の魅力を広く知ってもらう)に意義を考慮しておられた。②は現地での研究に至る日本での準備として、嘉幡会員は考古学の基礎学習、鈴木会員は現地の文化・言語学習を挙げられ、異なる入り方が示された。③では二人が現地で就職する経緯として、現地が必要とされる技術や学問的成果が認められたことを挙げられた。④は研究面や生活面におけるメリット(現場の近さ、情報収集、人脈等)とデメリット(経済面・環境面等)を、一概には言えないと留保しつつも、多数紹介して下さった。

今回は、総エントリー数82名(会員36名非会員46名)、参加者数55名だった。通常よりも非会員数が目立ち、多くの大学学部生と少数ながらも高校生と思われる方が参加した。オンラインという手法と共に、企画内容、さらに西アジア考古学会、文化遺産コンソーシアム、日本考古学関係者、高校教育関係者への協力依頼が参加を後押ししたと思われる。今後も継続して企画を考えたい。

(西日本研究部会幹事 村野正景)



(左: 嘉幡茂 2020『図説 マヤ文明』河出書房新社、右: 鈴木真太郎 2020『古代マヤ文明 栄華と衰亡の3000年』中央公論新社)

●第14回東日本部会・第12回西日本部会研究懇談会「若手研究者による研究の紹介2：モニュメントのはじまり—『捨てる』と『築く』のはざまから」

第14回東日本部会・第12回西日本部会として両部会合同の研究懇談会を2022年3月12日（土）13:00～15:30に実施した。今回も、研究担当役員と東西懇談会幹事が合同で内容を企画し、当日も運営協力して実施した。コロナ禍における取組として、オンライン開催とした。

本研究懇談会は、若手研究者による研究紹介の第2弾として、最近博士論文を提出された荘司一步会員にその研究成果についてお話しいただいた。オンラインならではの利点を活かして研究発表と質疑応答・議論をわけて実施した。つまり研究発表は事前録画された動画を一週間オンライン配信し（3/5～3/11）、懇談会当日（3/12）の時間は2名のコメンテーターによるコメントと質疑応答、参加者を含めたフリートークのみに充てた。第1弾の金崎会員の発表時に培ったノウハウを応用した形である。これにより、発表内容の理解を深めるとともに、懇談会では従来よりもより深い議論が行われることを意図した。

荘司会員の発表題目は「モニュメントの創出をめぐる一試論：先史アンデス古期の環境変動とマウンドの変容」であった。発表では、ご自身の発掘されたペルー北海岸に位置するクルス・ベルデ遺跡を事例とし、同遺跡のマウンド状遺構の形成過程がCV-Ia期（4200-4000BC）とCV-Ib期（4000-3800BC）の2時期で大きく変化することを指摘され、これについて動物遺存体や二枚貝のスクレロクロノロジー（硬組織編年学）分析等によって、古期の環境変動を通じて資源利用が大きく変化し、マウンドの形成に関与してきた集団内の協働性や資源をめぐる他集団との関係性にも変化が生じていったことを紹介された。その上で、モニュメンタリティおよび廃棄行為とモニュメントの関係性の議論に依りつつ、形成期の神殿更新やそれによる社会統合が突発的なことではなく、すでに古期においてもモニュメンタリティの萌芽や社会統合の端緒

が醸成されつつあったこと、したがって従来のモニュメント観では捉えられないような小規模なモニュメント等を射程に入れるために、モニュメンタリティの実践に焦点を当てる必要があること、「廃棄」と「建設」の不可分な関係に注目することで、モニュメントに継続性を生む原動力や集合的な記憶を構築するメカニズムについての議論を提供できることを論じられた。

この発表に対し、コメンテーターとして鶴見英成会員、日本考古学をご専門の若林邦彦氏（同志社大学）のお二人と発表者との質疑応答がおこなわれた。両コメンテーターはいずれも荘司会員の研究に高い評価を述べられた。その上で、鶴見会員からは「廃棄活動」の実態、とくにマウンドの外見等の詳細、気象の変化と建設活動の反復性の機能的な関係性等についての質問があり、若林氏からは日本の縄文時代や古墳時代との対比から社会集団の規模やテリトリー、隣接集団との関係性等の質問があった。その後、参加者全体と発表者の活発な質疑応答がおこなわれた。本研究懇談会を通じて、荘司会員の意欲的な研究は、参加者各自の研究にも刺激を与えたように感じられた。

なお総エントリー数82名、参加者数55名であった。日本考古学を専門とする方々も見受けられ、オンラインで実施することの効果もうかがえた。

（西日本研究部会幹事 村野正景）



（荘司会員の発表スライド）

事務局からのお知らせ

1. 第 27 回研究大会・総会の開催について

古代アメリカ学会第 27 回研究大会・総会を、2022 年 12 月 3 日（土）～12 月 4 日（日）の 2 日間にわたって開催いたします。ご多忙のこととは存じますが、万障お繰り合わせの上ご参加いただきますようお願いいたします。今大会は、原則として会場（名古屋大学東山キャンパス・野依記念学術交流館）にて対面開催することとなりました。

一方、今後の新型コロナウイルス感染拡大状況は予想が難しいところでもあるため、万一の場合に備え、オンライン開催に変更する場合の基準をあらかじめ定めるとともに、発表者が新型コロナウイルスに罹患した場合や濃厚接触者になった場合には、オンラインやビデオによる発表の機会を確保する方針をとることにいたしました。会員のみなさまには、この決定について、どうぞご理解を賜りますようお願い申し上げます。

本学会では研究発表について審査制をとっていません。発表を申請される会員は、研究大会実行委員長による別紙「第 27 回研究大会における研究発表等の申請方法と審査について」をご参照の上、研究発表の申請をしていただきますようお願いいたします。

なお、研究大会、総会のご出欠については、メールにてお知らせした URL から 2022 年 9 月 30 日（金）までにご回答ください（締切厳守）。総会にご欠席の方も、同じ URL から委任状を提出いただけますのでご協力をお願いいたします。

例年総会後に開催してきた懇親会につきましても、現在のところ、対策を講じたうえで

開催の予定ですが、状況に応じて遠隔開催の実施もあることをあらかじめご了承ください。

記

古代アメリカ学会第 27 回研究大会・総会

(1) 日時：一日目 2022 年 12 月 3 日（土）

研究大会 13:00～17:00（予定）

総会 17:00～18:00（予定）

二日目 2022 年 12 月 4 日（日）

研究大会 09:00～12:00（予定）

（発表本数が多い場合は午後の部も行います）

(2) 会場：名古屋大学東山キャンパス 野依記念学術交流館

なお、オンライン開催へ変更する場合、研究大会・総会の開催方法の詳細、発表の要領等につきましては、昨年同様に事務局および実行委員会から適宜ご連絡を差し上げる予定です。

また、ネット環境や技術的問題から、オンラインによる参加が難しいとお考えの方におかれましては、事務局までご連絡をお願いいたします。できる限りのサポートをおこなってまいります。

この件につきましてご不明の点がございましたら、事務局 (info@americaantigua.org) までお問い合わせ下さい。

2. 第 27 回研究大会における研究発表等の申請方法と審査について

古代アメリカ学会第 27 回研究大会実行委員長

伊藤 伸幸

会員より申請があった研究発表等については、研究大会実行委員会が審査をおこなったうえで発表許諾の可否について通知いたします。

発表を申請される会員は、以下の要領にしたがって申請して下さい。

記

以下の事項を記入し、**Word ファイル**にて事務局に添付ファイルでお送り下さい。

1. 発表申請者（会員に限ります）
2. 発表申請者住所・e-mail（発表申請者に対して審査結果をメールで通知します）
3. 発表カテゴリー（研究発表、調査速報、ポスターセッションのいずれか）
4. 発表タイトル
5. 発表著者（共同発表の場合、研究大会抄録、プログラム等に記載する順番通りに記入してください）
6. 口頭発表者（実際に口頭発表をおこなう者。会員に限ります）
7. 発表要旨（研究発表：1200 字程度、調査速報：800 字程度、ポスターセッション：800 字程度。要旨とは別に 1-2 枚の図版等を添付することも可としますが、その場合も要旨のテキストと同じファ

イルの中に組み込み、一つのファイルにして送付してください) A4判にて、1 ページ 40 字×36 行、横書き、余白は上 35 mm、下・左・右 30mm、文字は 10.5 ポイントで作成してください。

(※発表時間は、質疑応答を含め調査速報 20 分、研究発表 30 分を予定しています。ポスターセッションは A0 で 2 枚以内によるものとします)

*送付先: info@americaantigua.org (学会事務局)

*締切: 2022 年 9 月 30 日 (木) 午前 10 時 (メール必着)

古代アメリカ学会では、会員が共有する関心テーマについて集中的に議論できる場を提供するため、第 20 回研究大会より分科会枠を導入しています。分科会は、特定の研究テーマに即して、代表者を含めて 3-5 名のグループで発表・討論する場です。分科会に割り当てる時間は、口頭発表者数×20 分を予定しています。この時間をどのように使うかは、分科会ごとに判断してください。口頭発表の時間を削ってコメンテーターを導入したり、討論の時間を増やすことも可能です。なお分科会は、通常の研究発表・調査速報と同じ会場で実施され、発表時間が重なることはありません。ただし口頭発表できる機会は、研究発表・調査速報・分科会発表をあわせて一人 1 回です。分科会はコメンテーターを指名することができますが、それは口頭発表として数えません。分科会を組織する方は、分科会のタイトル、発表者(変更不可)、趣旨説明(1200 字程度)、全発表者の要旨(各 800 字程度)を取りまとめて、代表者として申請してください。送付先・締切は他の発表と同じです(上記をご覧ください)。なお分科会代表者・発表者は、オンライン出欠確認フォームで「発表申請」の「有」を選択してください。

審査結果については、10 月 14 日(金)頃までに、申請者にメールで通知いたします。この通知と同時に、発表許諾者にたいしては、抄録要旨の原稿依頼・執筆要領などもお知らせしますので、決められた期日までにご提出をお願いします。

なお、審査基準については、以下の「参考」をご参照下さい。とくに、単独発表か共同発表か、また著者の記載順をどうするかなどについては、あらかじめよくご調整のうえ申請をなさるようお願いいたします。

*参考 「古代アメリカ学会研究大会運営に関する申し合わせ(平成 23 年 12 月 2 日役員会決定)」より抜粋

・発表についての審査は、以下の原則に照らして判断することとする。

(内容)

(1)研究大会でおこなわれる発表は、現在の一般的研究状況において一定の水準に達していなければならない。

(2)発表の内容が、他の研究者の著作権やデータに関する権利を侵害してはならない(オンライン開催の場合、著作権には例年以上に配慮を要しますのでご注意ください。)

(形式)

(1)(口頭発表をおこなうことができる者)

口頭発表者(実際に口頭で発表をおこなう者)は会員でなければならない。ただし実行委員会が企画した招待講演・発表等についてはこの限りではない。

また、口頭発表者は、会員であれば第 2 発表者以下でも差し支えない。

(2)(発表者および共同発表者の記載順)

発表者名(単独発表か共同発表か、共同発表の場合発表者記載順など)は、データに関する権利等の観点から適切でなければならない。このため、口頭発表者が会員であれば、非会員は第 2 発表者以下の共同発表者となることできる。

(3)(複数の口頭発表についての制限)

1 回の研究大会において会員が口頭発表をおこなう機会は一人 1 回とする。ただし、複数の共同発表者(記載順を問わない)となることできる。

以上

3. 原稿募集

①会誌『古代アメリカ』の原稿募集

本学会の会誌『古代アメリカ』第 26 号(2023 年 12 月発行予定)に掲載する、「論文」・「調査研究速報」・「書評」の原稿を募集します。「調査研究速報」では、発掘などのフィールドワークの成果・報告はもちろんのこと、文献調査の報告やラボラトリーでの分析結果報告などの投稿もお待ちしております。投稿希望者は、最新の寄稿規定および執筆細目(ウェブサイト掲載)をよくお読みの上、ご投稿ください。

投稿に際しては「投稿エントリーカード」の提出が必要となります。「投稿エントリーカード」は、ウェブサイトよりダウンロードしてください。第 26 号への掲載を希望される場合の締め切りは、カテゴリにかかわらず、2023 年 5 月 20 日です。ただし、5 月 20 日までに提出いただいたとしても掲載が確定するわけではありません。「論文」と「調査研究速報」の掲載の可否は、規定による査読（原稿受領後 1～2 か月程度で終了予定）の結果を踏まえ、編集委員会で決定します。

お問い合わせ先：

山本睦、市川彰、福原弘識
（運営委員、会誌編集担当）

E-mail : aant.edit@gmail.com

②会報「48 号」の原稿募集

会報の内容を充実させ、会員の皆様はもちろん、多くの方々に古代アメリカの情報を広げたいと考えています。以下の要領で皆様からの原稿を募集しますので、会員の皆様には、ぜひ積極的にご投稿くださいますようお願いいたします。

【内容】

○エッセイ、論考など

特にジャンルは設定しないが、古代アメリカ学会の会報記事としてふさわしいテーマ。

○調査・研究の通信

最近行った調査、研究、関心等に関する紹介。
会誌『古代アメリカ』には投稿しないような簡易の情報も可。

○新刊紹介

古代アメリカ関連新刊書籍の紹介。

○その他

会員にとって有益な学術情報。

【形式】

○原稿字数は、写真・図版を含めて 4000 字（会報 2 ページ分）以内とします。超える場合は会報担当委員まで事前にご相談ください。

○原稿はワードファイルで作成してください。その他のファイルについては、会報担当委員まで事前にご相談ください。

【掲載】

○掲載に当たっては、会報担当委員から内容についての問い合わせや修正等のご相談をする場合

があります。また、投稿原稿が多数の場合は当該号では掲載されないこともあります。掲載の可否については、事務局にご一任ください。

○投稿原稿以外に、会報担当委員から依頼した原稿も掲載する予定です。

【投稿先・締切】

○添付ファイルの形で下記までメールにて送信してください。

お問い合わせ先：

五木田まきは（運営委員、会報編集担当）

E-mail : XXXXXXXXXX
（会誌とは異なるのでご注意ください）

○投稿締切 2023 年 7 月 15 日

○発行予定 2023 年 8 月下旬

4. 会費納入のお願い

会費が未納となっている方は、先にお送りいたしました振込用紙を使用してお振込みいただくか、または以下の口座に直接お振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

なお 2 年度分以上、会費が未納となっている会員につきましては、会誌・会報の発送を見合わせております。

ゆうちょ銀行 口座番号：00180-1-358812

加入者名：古代アメリカ学会

みずほ銀行山形支店

口座番号：1211948(普)

口座名義：古代アメリカ学会

なお、PayPal でのお支払いをご希望の方は、account@americaantigua.org までご連絡ください。PayPal ご利用の場合、決済は日本円でおこなわれます。年会費に手数料（2022 年 7 月現在：海外決済：4.1%+40 円、国内決済：3.6%+40 円）を含めた額をお支払いいただくこととなりますので、ご了承ください。

【重要】学生会員の会費納付書への所属機関記入について

本学会では学生会員に会費優遇制度を設けていますが、学生期間終了後は速やかに一般会員資格に移

行していただくために、「払込取扱票」で納入する場合には所定欄に現在の在籍校と学年を明記していただいておりますのでご協力をお願いいたします。なお、ネットバンキング等を通じて納入する場合は、振り込み前に事務局へ現在の在籍校と学年をご連絡願います。

【重要】所属機関が会費納入する際の納付書再発行費用について

文部省科学研究費補助金等で会費を納入いただくにあたって会員が所属する機関から納付書を再発行するよう依頼があった場合、その送付にあたっての送料は納付者の負担となります。ご希望される方は、あらかじめ学会事務局までお問い合わせください。

5. 2022年度学会費減額措置について

2022年2月3日付でお知らせしましたように、本学会では2022年度学会費について減額措置を設けました。一般会員ならびにシニア会員に対する減額措置申請期間は終了し（2022年6月30日締切）、申請者には審査結果を通知済みです。通知を受け取っていない方がおりましたら、学会事務局までお問い合わせください。

なお、学生会員ならびにジュニア会員には無申請でも減額措置が適用されますので、納入のほどよろしくをお願いいたします。

6. 会誌『古代アメリカ』既刊号の販売終了のお知らせ

昨年度総会で決定されましたように、会誌『古代アメリカ』の既刊号の販売受付は2022年4月30日をもって終了いたしました。

今後はウェブサイトで公開されている電子版をご活用ください。また、寄稿者の皆様におかれましては、電子版での公開にぜひともご協力いただきますようお願い申し上げます。

〈事務局からのお願い〉

現在、古代アメリカ学会では、学会とかかわる諸情報の連絡、および周知にメールを多用しております。まだ学会にメールアドレスを登録されていない方や、学会からメール連絡が届いていないという方がおられましたら、学会事務局までご連絡いただけますよう、ご協力をお願いいたします。すでにご登録いただいている方も、メールが返送されてくる場合がございますので、当学会事務局のアドレスからのメールが受信可能となるよう、設定をお願いいたします。特にGmailなどのフリーメールをご利用の方は、事務局からのメールが迷惑メールとして処理されないよう、学会事務局アドレスを登録するか、迷惑メール対象から解除する手続きを行ってください。

